
二人で見る未来 （利知未シリーズ 番外 2 ）

茅野 遼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二人で見る未来 （利知末シリーズ 番外2）

【Nコード】

N0911E

【作者名】

茅野 遼

【あらすじ】

利知末と倉真の結婚までのお話です。『貴方のために』の、続きとなります。少しだけ擦れ違ってしまっている同棲カップル倉真&利知末の二人に、ここから先どんな出来事が待っているのか……？

〈同棲時代 2〉

1

研修医一年・六月（前書き）

時代背景は、1998年頃。利知未25歳の誕生日前からの、三ヶ月間のお話となります。ごゆっくりお楽しみ下さい。

《同棲時代 2》

1

研修医一年・六月

同棲時代編 2

1 《研修医一年・六月》

—

六月は、梅雨の時期だ。今年も利知未は、乾燥機能付きバスの底力を再確認して、有り難く思う。

今月の二人の休日は、月頭の日曜・四日と、三週目の日曜、十八日だ。

『……ま、仕方ないけど』

三日・土曜日。利知未が一人の休日に、家事をこなしながら溜息を付く。

倉真とは、まだ少しだけ擦れ違っている感じだ。だからこそ、

二人でのんびりと過ごす事の、出来る時間。特に、休日は

少しでも、多く欲しいと思う。

笹原の事は、取り敢えずの解決を見た。口さがない噂好き達が

囁くその内容も。香が言っていた通り、どうやら誤解だったらしいと、話の向きが変わり始めてくれた。

従って最近、病院の居心地も、悪くはなくなってきた。

今は、倉真の心を気遣う事に、その気持ちを集中出来ている。

その点では、平穏と言えるのかも知れない。

倉真は、土曜出勤中だ。最近、テキストを会社に持ち込んで、昼休みにも開いて勉強している。

「……何て言うか。物凄い、涎の跡だな」

同い年の先輩、保坂が、倉真のテキストを横から眺めて呟いた。

「昔から、教科書の類は睡眠薬みたいなモンだったすからね」

照れ臭そうに倉真が言う。

今朝は、利知末が弁当を持たせてくれた。

「ご飯、食べに行ってる時間が、勿体無いから」

そう言っ、テキストを開きながらも食べ易い様に、大きな握り飯を四つ作ってくれた。

「解らないトコ、教えるか？」

「頼みます」

昼休みは保坂に教わりながら、勉強を進めた。

仕事が終わ、今日は利知末の休日だった事を思い出す。

『……早く、帰ってやらないとな』 そうは思う。

けれど、利知末に関する疑惑を持ち始めてからの自分が、利知末にどう見えているのか？ それが、少し気になり始めた。

『普通にしている、つもりなんだけどな』

最近、利知末の涙を見る機会が、増えて来た。それは自分を信賴してくれている、証であるとは思っのだが……。

少し、遠回りをして帰る事にした。

今の自分は、無意識に利知末に対して、何か悲しみを抱かせてしまっ態度を取っているのかもしれない。

慣れない勉強を続けている事で、多少、ウンザリとして来てもいいた。

何時も十分で到着する距離を、大回りに一時間近く掛けて帰宅した。

何時もの土曜出勤より帰宅が遅い倉真を、少しでも心配した。

『けど、土曜だって、残業が長引く事だって、あるよね』

利知未はそう考えて、深く悩まないように気をつけた。 近々、オペの予定がある担当患者の、予習時間を取る事にした。

オペ前には医学書を開く。 学生時代から授業のテキストとしても使用している物だ。

医学は日々進歩している。 病院には、医学コンベンションの開催連絡も来る。 利知未の働く大学病院では、医師が出張扱いで出掛ける事もある。

利知未は今の所、まだ参加した事は無い。 塚田や笹原などは、年に数回は参加しているらしい。 医療技術の復習、新しい技術の勉強・習得も、医師としては必要な事だ。

医学書を開きながら、五月に開催されたコンベンションでの話を、塚田から聞いた事を思い出した。

『医者とは、大学卒業して資格を取ったからって、それで勉強がお仕舞いになる職業では、無いんだよね……。 裕兄の夢を引き継がなかったら、あたしには、余り向かない仕事だったかもしれない……。』ふと、そう感じる。 利知未とて、勉強が好きで頑張ってた訳ではない。 目標があったから、友人達に助けて貰いながら、ここまでするまで何とか辿り着いた、と言う感じだ。

それでも、一人でも多くの人を助けて行きたい、と言う、今の利知未の思いも嘘ではない。

『けど。 倉真に、昼休みまで頑張れって言うのは、可哀想だったかも……。？』

倉真は、利知未以上に勉強が嫌いだ。 中学校時代までの自分も、似たり寄ったりだった。 あの頃は、裕一が見てくれて居たから、渋々ながら頑張ってた、と言うだけだ。

『もしかして、鬱憤溜まって、どっかで発散させて来てたりして』
時計を見て、そう思う。既に、八時を回っていた。
『発破掛けたの、あたしだし。帰ってきたら、労わってあげよう』
晩酌の摘みを、夕飯の他に作って置く事にした。

利知末がキッチンに立っていると、漸く倉真が帰宅した。 八時半を回っている。

「お帰り」

「ただいま」

利知末に迎えられ、倉真がキッチンへ踏み込んで、驚く。

「飯、まだ、食ってなかったのか？」

「一緒に食べた方が、美味しいでしょ。もしかして、食べて来ちゃった？」

「いや。バイク、走らせて来た」

「じゃ、お腹空いてるよね。手、洗って来なよ」

笑顔で言われて、複雑な思いに捕らわれた。

「……悪かった」

「どういたしまして。 摘みも、多めに作っておいたよ」

「サンキュ」

短く礼を言っ、倉真が手を洗いに、洗面所へ消えた。

その夜、倉真は勉強を止めた。 遅い夕食ついでに、晩酌まで終わらせた。

「息抜き上手にしないと、ストレス溜まっちゃうよ」

「そうだな」

「私も受験勉強の時は、良く息抜きしてたし。 明日は休みだし、どっか行こうか？」

「勉強のプラン、お前に立てて貰った方が良さそうだな」

情けない顔をして、倉真がぼやいた。

「協力するよ、テキスト見せて」

自分の勉強もあるが、倉真には頑張つて貰いたい。

その場でテキストを見せて貰い、晩酌をしながら、相談をした。

「学科試験、6つもあるんだね。当然ながら理数系だな。一ヶ月一教科ずつ終わらせて、年内に終わるでしょう。倉真、登録試験？」

「一応、そうなると思う。社長がその辺、手続きしてくれるらしい」

「したら、今年の十月は無理だから、来年の三月か。残りの三月で復習だね。実技の勉強は、会社で頑張つて」

「そうするよ」

「…それと、お弁当だけど。あつた方が、良い？」

「金は、掛からなくて済むけどな」

「でも、やっぱり昼休みくらいは、息抜きしないとね」

利知未には、お見通しらしい。

「偶には、作ってくれよ。お前が、余裕がある時でいいよ」

「うん、判った。じゃ、勉強の話はこれくらいにして、明日は、久しぶりに映画にでも行く？」

「映画館で、眠っちまいそうだな」

「じゃ、何処行こうか？」

「梅雨だからな。明日も、雨だろ？」

「天気予報では、そう言っていたよね」

「身体、動かしてーな」

「じゃ、ボーリングにでも、行つてみる？」

「久しぶりだな、そうするか。………どっかの室内プールでも、イイケドな」

ニヤリとした倉真を見て、利知未が少し赤くなる。

「それって、あの水着、着ろつて事？」

「アン時、見られ慣れたんじゃないのか？」

「恥ずかしいのは変わらないよ。 ボーリング！ 倉真、得意でしょ？」

「仕方ない、ビキニ姿は諦めるか」
照れる利知未は、可愛いと思う。 軽くからかって、少しだけ気が晴れた。

翌日は、前夜の約束通り午後から出掛けて行った。 今日も雨だ。最寄り駅から十分ほど歩いた場所にある、ボーリング場までのんびりと歩いた。

ボーリング場で、凄い子を見つけてしまった。

「うわ、あのコ、上手いな。 まだ、小学生くらい？」

小さな子供が、スピアとストライクをバンバン決めて、高得点を叩き出している光景に出会った。

「本当だな。 お前より、上手いんじゃないか？」

「倉真より、上手だったりして？」

昨夜から、何と無く倉真にからかわれている。 利知未も言い返す。「言っただな、見てろよ」

倉真はその子供と、密かに張り合ってしまった。

自分を観察しながらゲームを進める大きなお兄さんを見て、子供も自慢げな笑みを見せる。

「あ、あのヤロ、笑いやがった」

「ムキになってる。 子供相手に」

「ゲームにガキも大人も関係あるかよ？ …燃えてきた」

「頑張れ！」

声を上げて笑いながら、利知未が倉真に声援を送る。

利知未は、倉真とゲームをしながら、その子供と両親の仲良さそ

うな雰囲気に、つい見入ってしまう。

ボーリングが上手いのは、男の子だった。ストライクを取り、父親と母親、歳の近い姉と、手を打ち合わせて、はしゃいだ声を上げている。

ついでに、倉真を見てニマリと笑う。

「あはは。可愛い」

利知未が今まで見せた事の無い、大人の女性らしい、笑みを见せて呟いた。

その笑顔を見て、倉真は一瞬、止まってしまう。

「……利知未、ガキが欲しいとか、思ってるのか？」

自分の子供を、欲しいと思ってくれているのだろうか……？

ここまで、妊娠したかも知れないと言って、利知未が慌てたことは無い。もしかして、本当に不妊症なのか？ と、チラリと思ったことがある。

そう思う程に、去年の秋から、倉真は思う存分な事をしている。

利知未が相手の時は、避妊具を使用した事も無い。

抱き合う夜には、必ず一度は子作り行動に出ていたりもする。

……その度に、怒られている。

「もし、そう思ってくれていて、出来ない、体質つてのが、あるなら……」

男だから良くは判らない成りに、それが女には可哀想な事であるのは、何と無く感じる事が出来る。

利知未の義姉・明日香を見ている。職場の先輩にも、子供がいる。

「……ガキか。嫌いじゃネーけど、自分が父親になるってのは、考えたことも無かったかも知れネーな」

もしも利知未が妊娠したら、それを理由に、とは、思った事もある。

けれど、そこから先に、自分が父親になつてからのイメージが、キッチンと浮かんできた事は、無かったかも知れない。

「倉真、どうしたの？ 負けてるよ」

「…ン？ あ…、あー！ あのヤロ！」

倉真よりも高得点で、ワンゲーム終えていた。

「頑張れ、頑張れ！」

利知未に再び声援されて、ボールを投げる。

余計な事を考えていた所為で、狙いを外してしまった。

「あーあ、合計、20点の差で、ワンゲーム終了！」

「くそ。 次のゲームで、巻き返す」

「あの家族、もうそろそろ帰るみたいだけど？」

靴を脱ぎ、自分の使っていたボールを、其々が片付け出している。

ボールを返しに来たついでに、男の子が、倉真の近くへ寄つて来た。

「お兄ちゃん、何点？ …やった！ おれの勝ちい！！ じゃーね、楽しかったよ」

不敵な笑みを見せて、家族の元へと、戻って行った。

両親が、笑顔で会釈を寄越した。 倉真と利知未も会釈を返して、

利知未は、手を振って言う。

「バイバイ」

「ばいばい！ お姉ちゃん！」

男の子が、元気に返事を返してくれた。 倉真が、男の子に向かって言う。

「次は、負けネーぞ？！」

「毎週、来てるよ！ またね！」

男の子は、倉真にも、そう返してくれた。

家族が帰ってから、倉真は特訓だと言って、その後、3ゲームもして帰宅した。 利知未は倉真に付き合っ、流石に少し疲れてし

まった。

夕食は済ませて帰る事にした。一つの傘に、二人で入って歩く。

「倉真の負けず嫌いは、対象年齢、幅広いな」

くすくす笑って、利知未が言う。

「男同士ってのは、そー言うモンだ。…と、思っけどな」

「もしも、子供が出来たら、倉真も子供に特訓するの？」

「ボーリングか？ 喧嘩の仕方、特訓するかもな」

「不良少年、育てるつもり？」

「身を守る方法、教えるんだよ」

「だったら、私が……、…何でもない」

言いかけて、止まる。肩を小さく竦めて、寂しそうな笑みを浮かべる。

「お前が、合気道でも、教えてくれるのか？」

「……どうして、倉真の子供に、あたしが教えるの？」

倉真にその気は、あるのだろうか？ その疑問は、まだ解決していない。

「……俺たちのガキだったら、お前が教えてくれるんだろ？」

利知未は他に、同じ病院の医者と……。あの話は、まだ。倉

真の中で、解決していない。

「……そうだね」

利知未の様子に、倉真が何か言いかける。

「お前、」

「何？」

小首を傾げた利知未の視線を受け、その視線を倉真は逸らす。

「……悪い、忘れた」 『聞ける訳、ネーよな』 そう思う。

小さく溜息を付いてから、利知未は、少し無理をして、明るい声を出した。

「お腹、空いたね。 何、食べて行こうか？」

それ切り、その話は出さなかった。

二

翌週から、その翌週。二人の雰囲気は、微妙なままで過ぎてしまった。

倉真が勉強をしている隣で、利知未も医学書を開く。生活その物は、何ら変わる訳でもない。

利知未は、自分の仕事の合間を盗んで、家事も確りこなしてくれる。倉真の協力体制も、特に崩れる事は無い。

お互いに、勉強時間に紛らせて、重い話には極力、触れないようにして過ごしていた。

利知未は、やはり心配になる。それでも、倉真が何も言い出さない限り、自分から触れるのは、止めようと決めている。

ただ、明るい雰囲気さえ、保つ事が出来れば……。今は、それで良い。

倉真は、利知未が隣で勉強をしていれば、居睡りをしてしまう事も無い。利知未は休憩に、懐かしい珈琲の味を再現してくれる。

「……余り、思い出したい事じゃ、無いんだけど」

珈琲を飲みながら、利知未がふと言い出す。

「何だ？」

倉真はテキストを開いたまま、利知未の呟きに問い掛ける。

「……昔、一月間だけ、母親と暮らしてみた事がある。あの頃、毎日、夜中に珈琲、淹れさせられてたよ」

「何時頃の話なんだ？」

母親の事を言い出す利知未は、珍しい。　倉真はテキストから、顔を上げた。

「中学一年の、初め。　私は、城西中学には、転校して来たんだよ」

「そうだったのか？　始めて聞いたよ」

「始めて、話した。　ただ、それだけ」

それ以上、母親の事は、言わなかった。

倉真は、利知未の心の中にある、母親に対する思いを、敏感に汲み取った。

「……そうか。…珈琲、美味いよ、サンキュ」

利知未は微笑して、小さく首を、横に振った。

翌日、十五日・木曜日に、利知未はオペを控えていた。　無駄話は早々に切り上げて、下調べに集中した。

その夜は、倉真が寝室へ引込んだ時間よりも、少し遅くまで、医学書に向かっていた。

午後一番で、オペが入っていた。　二度目の症例で、初めての時よりは気持ちも落ち着いていた。　無事、終わらせて、力がふつと抜ける。

患者の家族に術経過を報告して、カルテに記入した。　それから漸く医局で一息入れた。　妻帯者・野口医師が、労いの言葉を掛けてくれた。

まだ、手術自体が、7回目だ。　今までの所、失敗も無く終わっている。

自分の性格は、判っているつもりだ。　何かが起こってしまった

時に、慌てずに対処するために、利知未は処置前、数日間を勉強に充てている。今までの成功事例も、その甲斐あつての事だろうと思う。

外科の先輩医師たちは、利知未のその努力は知ってくれている。医学書を片手に、手の空いている医師を捕まえて相談する事も多い。野口も何度か、利知未の質問に答えてくれている。穏やかな人だった。うだつが上がらない、と言う方が、的を得ている表現かもしれない。その分、余計に優しい人だった。

先輩医師達は、塚田が人柄でも実力でも、経験でも、群を抜いていると思う。笹原は、野心を持った実力主義者だ。仕事に対する姿勢と女に対する姿勢は、勿論、全く違う。

藤澤は、その若さもあり、利知未にとっては良い兄貴分とも言える。スポーツ系に強いので、そちらへの拘りは、かなり有るようだ。研究熱心なタイプでもあり、アスリートの為の、新しい治療方針を良く研究している。婚約者が栄養士の資格保持者で、食からの治療にも見解が明るい。

一日の業務を終え、利知未はくたびれて帰宅した。少し、残業になってしまった。今日は、倉真の方が早かった。

その日、珍しく定時で上がった倉真は、最近の自分を反省して、偶には利知未の為に夕食でも作つてやろうと言う、殊勝な気持ちになつていた。

買い物をして帰って、帰宅は六時半だ。恐らく利知未よりも早くに着くだろうと踏んでいた。

利知未は六時に上がり、買い物をして六時五十分頃だ。それから直ぐに支度を始めて、平日は七時半を過ぎる、倉真の帰宅時間に丁度だ。

今日は、遅くなってしまった。冷蔵庫の中身を思い出し、それで何か作れるだろうと、それでも七時過ぎには帰宅して来た。

玄関を入った利知未は、キッチンに立つ倉真を見て目を丸くする。

「お疲れ。飯、もうチョイ待ってくれ」

「ただいま。倉真、今日は早かったの？」

「珍しくな。偶には、いいだろ」

照れ臭くなって、視線を外す。

「風呂、入ってる」

「ありがと」

感謝の気持ちを、照れて視線を外している倉真の頬へ、キスで表す。薄く口紅の跡が付いてしまった。

「キスマーク、ついちゃった」

親指の腹で、その跡をそつと拭って、くすりと笑う。

「手術、上手くいったのか？」

「二度目の症例だからね。何事も無く。折角だから、お風呂入

ってきちゃうよ」

「出る頃には、出来るよ」

「うん、ありがと」

もう一度礼を言って、着替えを取りにリビングへ入る。

オペのある日は、やはり疲れる。それまで数日間の勉強時間を含めて、どつと疲れが出て来るのかも知れない。倉真の気遣いは、有り難かった。

利知未が風呂へ入っている時間。

パスタを茹でながら、倉真は考え込んでしまった。

五月に、整備工場の客から聞いてしまった、利知未と笹原の目撃

情報と、今月頭の休日の、利知未の雰囲気と二人の会話を思い出す。あの話を聞いてから、一月半だ。真相を聞くに聞けずに、今まで過ごして来た。それから、ボーリング場で、家族連れの様子に見入っていた利知未が溢した笑顔と、その後の会話。

もしも、利知未が。女の肉体的機能として、満たされない物を持っているのなら、労わるべきだ。同時に、自分の気持ちも考える。

昼間、倉真は先輩に問い掛けた。

「ガキって、やっぱり可愛いモノなんすよね？」

行き成りの質問に、先輩は少し驚きながら、笑顔で答えてくれた。

「可愛いぞ？ 最近、上の子が一緒に風呂へ入ってくれなくなっただけ。少し寂しいけどな」

「男は、いなかったっすか？」

「今、妊娠中だよ。エコーで、どうやら男らしいって、医者が言っていたよ」

「それで、何人ですか？」

「三人目だ。どうした？ 結婚でも考えてる女が、出来たのか？」

「つつーか、女の方が、子供は欲しいもの、っすよね？」

「それは、どうだかな……？ 家のは妊娠中、ぼやいてるぞ。重

くて大変だから、早く出てきて欲しいって。知ってるか？ 5キ

口あるんだとさ、臨月頃には。それ、腹にくっつけてるんだから、

大変は大変、何だろうな」

「考えられなーな」

「おれも、考えられないと思う。……女は、偉大だよ」

昼休みの会話だ。先輩は、妊娠中の奥さんの、愛妻弁当を使っ

ていた。

その会話を含めて、真面目に考える。……それと、問題の医師

の存在。

『……綺麗に、成り過ぎだ』 心の中で、呟いた。

利知未が以前と同じ男っぽい雰囲気の儘だったなら、そちらの問題は誤解だと思い切れるかも知れない。

それでも、利知未は昔からモテるタイプだったらしいとは、感じている。

『そりゃ、そーだよな。……俺は今の所、アイツ以上の女には、会った事は無いと思うしな』

聞く人が居たら、立派な惚気だ。……けれど、それ程に愛しいと感じられる、女だからこそ。倉真の心は、益々、複雑だ。

考え込んでいて、風呂から上がって来た利知未に、気付かなかった。

「倉真？」

返事が無い。 倉真はパスタを湯で溢し、箸を持ったまま止まっている。

「倉真！ どうかした？」

腕を軽く掴まれ、揺すられて、漸く気付いた。

「…ん、あ…？ ああ、悪い。 何だ？」

「パスタ、固まってるよ」

手の箸を見て、我に返る。

「…何やってんだろーな」

自分の小さな失敗に情けない顔をして、ぼやいた。 利知未が小さく笑みを見せ、倉真の手から箸を受け取った。

「いいよ、疲れてるんじゃない？ 最近、勉強も大変だったから。後は、私がやるから」

「…悪い、任せるよ」

首を竦めて、ダイニングチェアへ腰掛けた。

利知未は固まったパスタに、オリーブオイルを掛け、絡まった麺を解す。

「はい、お待ちどうぞ様」

利知未が、二人分のパスタを皿に盛って、テーブルへ置く。

「冷蔵庫に、サラダが入ってるぜ」

「OK。ドレッシングは、どっち使う？」

「和風ので、良い」

サラダも出して、ドレッシングを出し、作り置き of 麦茶を出す。

グラスに注いで、冷蔵庫へ仕舞い直して、利知未は漸く、席に落ち着いた。

倉真は、その間もぼんやりとしてしまう。首を傾げて、利知未が言う。

「…大丈夫？ ご飯、食べよう」

合掌して、食事を始めた。一口食べて、笑顔を見せる。

「うん、美味しい」

声に、倉真が反応する。

「缶詰のソース、温めただけだぞ？」

「それでも、美味しい。パスタの湯で加減も、上等、上等」

「…そうか？」

気の無い返事に、利知未は心配に成る。半分ほど食事を進めて、もう一度聞いてみた。

「…ね、倉真。…私がこう言う風だと、やっぱりおかしい？」

「こう言う風？」

「…もし、そうなら、今まで通りに戻るよ？」

態度や、言葉の事を言っていると、気付く。

「…そーじゃない」

視線を合わせずに、倉真が言う。利知未は、首を小さく傾げる。

「…ただ、不安なだけだ」

「何が？」

「…お前、もしかして、病院で何か、変った事は、…無かったか？」

言い難そうな雰囲気、ピンと来る。…もしかして、倉真は。

食べかけの食事をそのまま、前屈みになって、倉真の頬へ手を伸ばす。

「ヘンな誤解、しないで」

キスをして、驚く倉真に、そう呟いた。涙が一粒、流れ落ちた。立ち上がり、後ろを向いてしまう。テーブルの端に軽く手を突いて、少しふらりとする身体を支える。涙が、次々と流れて来てしまう。

その涙を手で拭いながら、利知未が言う。

「……あたしらしく、無いな。……ただ、倉真に嫌われたくないだけ……」

泣きながら、昔の言葉に、戻していく。

「……それだけ、なんだ。……本当に、……あれ？ どうしたんだろう。涙、止まらネーよ……。引っ込めようと、してんだけどな……」

しゃくり上げてしまう。二回、三回……、五回……、六回……。

倉真の前の、今の利知未に、男言葉は無理がある。

テーブルを離れて、寝室へ逃げた。

これ以上、倉真の前で、泣いちゃいけない……。誤解、されてしまつかもしれない……。

倉真は、漸く我に返る。慌てて、利知未を追いかけた。

「……利知未！」

ベッドの端に掛けて、利知未は、泣いていた。

「利知未」

もう一度、声を掛けながら、倉真が利知未に近付いた。反対側から、ベッドへ上がって、後ろから、利知未を抱しめた。

ビクリとする利知未の、耳元で囁く。

「…………ごめん」

その言葉は、心から反省している時にしか、使わない。

利知未は、倉真のその癖を知っている。

小さく、首を横に振った。

「…………倉真の前だけでは、女らしくして、居たかったんだ。それだけだよ？ 本当に…………。だから、…………ヘンな誤解、しないで」

また、涙が溢れ出す。

倉真がこの約一月半、どういう気持ちで自分を見ていたのか…………？ それを思うと、涙が収まってくれない。

「本当に、あたしらしくないね。…………涙、こんなに出てきちゃうんだもんね」

「…………ごめん。俺が、泣かせていたのか…………お前の事を。…………俺は、馬鹿だな」

利知未は、もう一度、首を横に振る。

「俺の前で、お前が泣くのは構わない。…………けど、俺が泣かせたら、いけないんだよ。…………本当に、俺は馬鹿だ」

「…………あたしが、馬鹿なんだよ。…………もっと早くに、話し合っていれば良かった」

笹原の事も、相談するべきだったかも知れない。そうすれば、ヘンな誤解を、生まずに済んだ。

利知未を抱しめたまま、倉真が始めて、利知未に言った。

「…………愛してる。お前を、マジで。…………初めてだよ、こんなに」

誰かが愛しかつたのは。……だから、ヘンに焼くんだ。お前が最近、急に女らしくなっちまったから、……俺の所為だとは思えなかった。……他に、誰か……、」

それ以上を、倉真の口からは、聞きたくなかった。

利知未は大きく被りを振って、振り返り、その唇をキスで塞ぐ。

「……それ以上、言わないで。……悲しく、なっちゃうよ?」

倉真の背中へ、腕を回した。力を込める。

「他の誰を、好きになるの……? 私は、貴方を愛してるんだから」
小さな声で、利知未を呼ぶ。その名前に、愛情を持って。

「倉真……私……」

その続きを、抱しめたまま、待った。

「……どうしたら、良いのかな? もっと女として、倉真に愛されたいのに……。どうしたら良いのか、……判らなく、なっちゃったよ」

「利知未は、利知未だ。今まで通りで、居てくれれば良い」

「私が、女らしいのは、イヤかな……?」

「……ンな事、ある訳ネーだろ? 俺が馬鹿だったんだ。女らしくても、男っぽい儘でも、お前は、お前なのに。勝手に疑って、拳句に、泣かせちゃった。本当に、どうしようもないヤツだ」

「……私が泣くのは、倉真の事だけだよ」

少し力を緩めて、倉真の瞳を、じつと見つめる。

「同じだよ。……私も、こんなに誰かが愛しかつた事は、無かった……」

嘘みたい、と呟いて、倉真の肩に顔を伏せる。その肩に、キスをする。

「……同じ気持ちなら」

その先を聞く前に、利知未が囁いた。

「……抱いて、くれる?」

優しく、その身体を、ベッドの上へ横たえた。

抱しめあい、キスをして、求め合う。

ベッドの上で、その露な姿を隠す事もなく、利知未が恥ずかしげに囁いた。

「……可笑しいね。　凄く、体中が熱いよ……。　初めてじゃ、無いのに……」

また、彼に対する愛情が深まり、利知未は不思議に、恥ずかしさを覚えた。

二人の肌が合わさる。

何時も以上に、激しくお互いを求め合い、漸く身体を離して、寄り添った。

「……今日、忘れちゃった」

呟くように、利知未が言う。

「何を？」

気だるげに、腕の上にある、利知未の頭を引き寄せて聞く。

「……ピル、飲むの」

「ピル？」

「……ごめんね。　…避妊薬、ずっと、使ってたの」

その告白に、ビックリした。

「……何時からだ？」

「もう、二年位になるよ。　…どうしよう？　今日、出来たら」

倉真に、結婚の意志があるのかは、まだ聞いていない。

……倉真は、何て言うんだろう？

利知未は不安だった。　倉真は、呟いた。

「……良いんじゃないか」

利知未が頭を動かして、倉真の顔を見つめる。

「出来たら、結婚すれば。俺の稼ぎが、不安だけだな」
言いながら、小さく笑う。

……何だ、そうだったのか！ そう、心の中では言っていた。

「……良いの？ ……それで？」

「当然だ。俺は、結婚するんなら、お前以外は考えられネーよ」
利知未の頭を抱しめる。腕の中で、利知未は嬉しそうに微笑む。

……考えて、くれていたんだ。

不安が深かった分、余計に嬉しく感じる。

「……あたしも」

利知未も、倉真の身体に腕を回して、抱しめた。

その隙間から、そつと顔を覗かせて、倉真の唇に、キスをする。

「…倉真、コンドーム着けるの、嫌いなだけかと、思ってた」

「違うよ。お前となら、良いと思っていたんだ。 ……違うな。
いっその事、ガキ作って済し崩しに結婚、言い出そうかと計画してた」

倉真の告白に、今度は利知未がビックリだ。

「……そうだったんだ。 ……でも、ありがとう。 ……凄く、嬉しい」

「お前は、不妊症なんじゃ無いかって、思ってたんだぜ？ この頃」
利知未がくすりと、小さく笑う。

「そんな心配、してくれてたんだ……。 黙ってて、ごめんね」
もう一度、キスをした。

「けど、責めて、もう少し待って。 ……研修医、終わって、ちゃんと医者にならないと……。 裕兄との約束、果たせないから」

「何年だって、待つさ。 お前が、納得するまで」

「本当に良いの？ 納得、何時するか判らないよ？」

「赤いチャンチャンコ着るまでだって、待つよ」

「……それは、凄いな」

「それだけ、お前以外は考えられない、って事だ」

「……倉真」

愛しげに、切なげに、利知未が倉真を呼ぶ。身体を摺り寄せる。

「もう一回、ガキ作りにチャレンジするか？」

「それは、駄目。……けど、もう一回。……抱いて」

キスをして、再び二人は、身体を併せた。

その夜、一つの誤解が解け、新たに、お互いの本当の気持ちを判り合えた。

ピタリと寄り添って、二人は朝まで、ぐっすりと眠った。

翌朝。これまでの不安が漸く解消された所為か、二人揃って寝坊してしまった。慌てて起き出して、昨夜の残りで朝食を済ませた。

バタバタと支度をして、先ず始めに利知未が出掛けて行く。

「面倒だな、バイクで行っちゃおう」

「間に合うか？」

「バイクなら、大丈夫。ね、倉真。明後日、休み一緒にしょ？」

映画、行こう」

「見たいの、あったのか？」

「一寸、面白そうなの見付けたから。大丈夫だよ、倉真の苦手な

恋愛映画じゃないから。って、もうこんな時間！ ごめん、帰っ

て来たら、ゆっくり話そう！」

キスをして、急いで玄関へ向かった。

「気を付けろよ？」

「うん、行つてきます！」

バタバタと、玄関を出て行った。そんな利知未を見るのは楽しい。つい、小さく吹き出してしまった。時計を見る。慌てて

支度をした。

「やべ、今日、ゴミの日だ」

気付いて、ゴミを出す支度もする。　タダでさえ慌しい朝が、益々、慌しくなってしまった。

十分後、ゴミ袋を担いで、倉真が玄関を出る。

鍵を掛けて、ふと考えた。

『マジ、結婚考えるんなら、このアパートも、その内、出て行く事になるんだよな……。　その前に、金、貯めネーと……。』

自分の夢を実現する前に、利知未との結婚資金も、貯めて行かなければ。

その前に、エンゲージリングも必要に成りそうだ。

ゴミをアパート前の集積所へ出して、バイクが止めてある駐輪所へ向かった。　バイクへ跨り、改めて気を引き締め直した。

「気合入れて、仕事に励むか……！」

ヘルメットを被って、呟いた。　エンジンを始動して、公道へ出た。

今日は、梅雨の晴れ間が、広がっていた。

バイクを駆る、倉真の視線の先では、厚い雲の切れ目から、朝日が爽やかに、射し込んでいた。

三

土曜日。　今日も一人の休日に、利知未は家事をこなしながら、鼻

歌が口を付いて出てくる。

エンゲージリングは勿論、まだ貰ってはいない。それでも、一昨日の夜、二度目の大きな喧嘩のお陰で、嬉しい言葉を聞かせて貰った。

『……やっぱり、倉真の子供なら、早めに欲しいな』 そう考えて、その気持ちが自分だけの物ではなかった事实に、幸せそうな笑みが零れる。

『けど、もう少し……』

出来ちゃった結婚は、したくないと思う。それは、生まれてくる子供にも、少し無責任な気がする。何より、まだ自分は研修医だ。

『倉真の気が変わらないように、もっと、頑張らないとな』 思つて、微かに頬が緩む。

梅雨の晴れ間は、本当に一日だけだった。今日は、バスルームに洗濯物を干しながら、その仕事一つにも、幸せを感じていた。

倉真は、何か吹っ切れた様子で、仕事にも、勉強にも集中し直した。益々、確りして来たその様子を、社長は見てくれていた。

何時か、自分の整備工場を持つのが夢だと言っていた、初対面の倉真を思い出す。

あの頃は、本当にそこまで頑張れるヤツなのか？ 履歴書に記入された倉真の経歴を見て、半信半疑でもあった。

一年四ヶ月、見続けて来て、漸くその思いの強さを、信じられる気がする。

娘婿は、整備士資格一級の所持者だった。そつと、館川の面倒を良く見てやってくと、伝えた。

翌日、十八日の日曜日も、雨だ。バイクで行くのは無理だろう。倉真は思い付いて、去年、自分が贈った洋服一式を、利知未に着せて、出掛ける事にした。

「ね、本当に、この格好で行く？」

「イヤなのか？」

「イヤじゃ無いけど。…やっぱり、チョット恥ずかしいよ。雨

の日に着るのも、勿体無いし」

「水溜り、抱えて歩いてやるよ」

「また、そー言う事、言って」

笑いながら言う倉真に、利知未は恥ずかしげな表情のまま、可愛く膨れる。

「行こうぜ？」

利知未の手を引っ張って、玄関へ向かった。

傘は、一本しか持たなかった。二人で寄り添うようにして、駅へ向かう。

女性らしい服装の利知未は、その外見と長身で、やはり目立つ。

倉真は綺麗な恋人を連れ歩いて、気分が良い。

見栄は、やはり持っている。そう言う時は、何時も以上に利知未の身体を引き寄せて、上機嫌な様子だ。

『……嬉しいけど、……倉真、やっぱり子供みたいかも』

肩を抱かれ歩き、利知未はそう感じる。

傘は、倉真が持ってくれている。利知未は雨に濡れて、折角のスカートがグショグショにならないように、気をつけながら、何時もよりも淑やかに歩く。

電車を利用して、少し遠い映画館まで、足を伸ばした。
「お前、ポケットに財布、入れてるのか？」

「この格好に似合う、バッグは持ってないから」

「ついでに、探すか？」

「そうだね」

電車の扉付近に、倉真に守られながら立ち、話をした。長身力ツプルは、何処にいても目立つ。乗客の視線を感じる度、利知未は照れ臭くなる。

その雰囲気、益々、利知未の可愛らしい部分を、引き立てている。

倉真は、利知未を抱しめたい心境に駆られる。公共の場である。我慢して、その腰に手を回す。引き寄せて、益々、ピタリとくっつく。

「…ね、倉真。…チョット、恥ずかしい」

利知未が小さく呟いた。

「気にするな。俺は、良い気分だ」

倉真の言葉に、利知未は、また照れてしまった。

映画館で、上映時間を確かめた。

「今、始まったばかりだね。次は、二時間後か」

「先にバッグ、見に行くか？」

「そーだね、それで何処かで、お昼食べて戻ったら、丁度かな？」

宏治の母・美由紀から昔、貰った、女持ちの腕時計を確認して、頷いた。気付いて、倉真が言う。

「時計は、そう言うのも、持ってたんだな」

「滅多に、使わないけどね。大学合格した時、美由紀さんがお祝いにくれたんだよ。偶には、この時計じゃないと釣り合いの取れないような格好もしなさいって。……何時ものは、裕兄の形見、だから」

少しだけ、寂しそうな表情で微笑んだ。涙は、零れない。

『……倉真が、居てくれるから』 笑顔のまま、裕一の話が出来

るようになって来た事を、改めて感じる。

「じゃ、チケットだけ、先に買って行こう」

「ああ、出すよ」

「倉真が、出してくれるの？」

「これくらいはな。飯は、割り勘で」

「了解」

倉真がカウンターへ一人で寄って行く。チケットを二枚、買って来た。

それから、バックを見に行った。財布とハンカチ、口紅が入れば、取り敢えずは良いと思う。小さめの、夏物の手持ちバッグを見つけて購入した。早速、ポケットの中身を、入れ替えた。再び、二人で一本の傘へ入り、昼食を取りに向かった。

この日、見た映画は、コメディータッチのサスペンスだ。某男性アイドルが、女装をしてステージに立つ主人公を演じていた。そこそこのアクションも入り、二人の息抜きには、丁度良い内容だった。

映画を観終わり、軽く喫茶店で、お茶を飲む。映画の感想を話した。

「お前の、男版みたいだったな」

「あんなに、ゴツくは無かったと思うけど」

「男が女装して、ゴツくなるだろ？ 女が男の振りして、美少年の出来上がりって、事なんじゃないか？」

「美少年、ね。確かに、あの頃は、そう言う触れ込みでやってたけど」

「格好、良かったと思うぜ？ FOXのセガワ」

「また、男みたいな格好して、腕組んで歩いて見ようか？」

昔のデートでの失敗を冗談にして、利知未が言う。

「それは、止めてくれ。折角そう言う格好してるんだ。頼むから、普通のカップルで居させてくれよな」

情けない顔をして、倉真が言った。綺麗な利知未を連れ歩くのは、気分が良いのだ。折角の気分を壊したくは無い。

「……じゃ、偶には、もつと女らしく、してみようか？」

下宿の里沙を思い出して、あの仕草を真似してみた。組んできた足も下ろして、上品に座り直し、コホン、と、軽く咳払いなどして見る。

里沙の微笑を称えて、口を開きかける。

「……、……」

「どうした？」

腕を組んで、楽しげに利知未を観察していた倉真が、突っ込む。

「……何、話せばいいんだろ？」

瞳を真ん中に寄せて、利知未が呟く。その様子が可愛くて、倉真は、吹き出してしまった。

「無理すんな。利知未は、利知未だ。いいよ、何時も通りで」

「折角、頑張ってみようと思ってるのに。無理って事、ある？」

利知未が、軽く膨れる。

「最近のお前なら、それ以上頑張る必要も、ネーだろ？」

何しろその変化に、他に好い男が出来たのでは無いかと、倉真自信が疑ってしまったくらいだ。

「やーメタ！ どうせ、無理みたいだし」

下ろしていた足を、再び組み直して、テーブルへ頬杖を突く。

「お、膨れた」

倉真が利知未の態度を見て、また笑う。妹・一美を思い出して、膨れた利知未の頬を、突いて見た。

ぶ、と、膨れていた頬つぺたから、空気が漏れる。利知未も、

吹き出してしまった。

「……何か。小学校の頃、裕兄に同じこと、された事ある。思出しちゃった」

「俺も、小学生の一美に、同じ事してたな」

倉真から家族の話が出ることも珍しい。笑いを収めて、その顔を見つめてしまう。

「倉真、妹とは、仲良かったんだね」

「仲が良かったって、言うのか？ 相手にならなーよな、4歳も違うと」「そうかな？ あたしは良く優兄と、取っ組み合いの喧嘩してたけど」

「お前は、特別だろ」

「…そーかも、知れない」

あの頃を思い出して、利知未が言った。表情は明るい。

「…ありがとう」

「どうした？ 行き成り」

「昔の事、思い出しても、悲しくなくなってきたよ。……倉真の、お陰」

「……俺は、何もしてなーよ」

「傍に、居てくれてるでしょ？ ……愛してくれたから」

「…照れるな、こう言う所で、そー言われると」

「ごめん。でも、本当に感謝してるよ。…これからも、宜しくね」

利知未の笑顔を見て、思い付いて、立ち上がる。

「バースデー・プレゼント、買いに行かないか？」

「プレゼント？ 一美さん、六月生まれなの？」

恍けた返事に、倉真が小さく笑う。

「週末だろ？ お前の、二十五の誕生日」

「あ…もう、そんな時期か。すっかり、忘れてた」

最近、ナース達と話していた、会話を思い出した。

「クリスマスケーキだな」

「何だ？ それ」

「知らない？ 二十六日になると、イチゴを取り変えなきゃ、売れないんだって。ついこの前、そんな話になったんだ」

「…？ 解らネー」

「いいよ、気にしなくて」

利知末も立ち上がり、悪戯心が疼きだす。

「…じゃ、高い物でも、ネダろうかな？ 行きましよう、倉真さん」
ビックリする倉真を見て、くすぐすと笑う。

「里沙の真似、してみようかと思って…、じゃ無くて、思ったのよ？」

倉真の腕に、自分の腕を絡めて、レジへ向かった。

店を出て、再び、一本の傘へ入った。

ピタリと寄り添って歩きながら、利知末の悪戯は続く。

「何を買って貰おうかしら？ 私は、新しいジャケットが欲しいわ」

「…何か、妙な感じだ。」

「失礼ね、これでも、猫を被るのは得意なのよ」

堪え切れずに、利知末は吹き出してしまった。

「…けど、やっぱり、止めようか？」

「…偶には、面白い」

「そう？ …じゃ、続行。ジャケットを、プレゼントして貰えるかしら？」

「ジャケットで、良いのか？」

「ライダージャケット。ちゃんと、レディースで探してね？ 次のデートでは、間違えられないように」

「了解」

里沙の口調を真似して、上品に振舞う利知末を見るのは、また新鮮な気がして楽しかった。けれど、くすぐったい感じもする。

一日、照れ臭い気分で、過ごした。

倉真は利知末のリクエスト通り、レディースのライダージャケットを買ってくれた。

もぞもぞと動き出す。 倉真が切れた。

ほんの二分後、二人が降りる駅に到着した。 扉の開く瞬間に、倉真はそいつの腕を、擦じ上げた。

「痛ててて……！ この野郎！ 何しやがる?!」

その中年男は、まだ夕方だというのに、酔っ払っていた。 手に日本酒の紙パックを、握り締めていた。

「何しやがるだあ……? ふざけんな!! この、痴漢野郎!」

昔取った杵柄だ。 倉真の迫力に、男はびびった。

そのまま、ホームへ引っぱり出して、喚く男の腕を益々、強く捻り上げた。 駅員が慌てて走って来た。

「どうしましたか?!」

「痴漢です。 彼女の尻を、触ってました」

利知未が恥ずかしそうに、倉真の左腕に軽く縋り付いた。

「倉真、力、入れ過ぎだよ」

囁かれて、少しだけ力を緩めた。 その拍子に男が喚く。

「何の証拠があるってんだ?! ああ!?!」

…… 倉真は、完全に切れてしまった。

「現行犯がホザクんじゃネー! 彼女は、俺の婚約者だ! 出る所でたつて、良いんだぜ……?」

腹からドスの利いた声を出し、恐ろしげな睨みを利かせる。 その、あまりの迫力に、男はすっかり、大人しくなった。

「……ご協力、ありがとうございます。 こちらへ」

倉真の迫力に、男と一緒に一瞬、止まってしまった駅員が、気を取り直して、男を引き渡すように促した。 男を連行して行く。

気付くと、人だかりが出来ていた。 利知未は、恥ずかしくなった。

「婚約者は、言い過ぎじゃない? ……でも、ありがとう。 嬉しいよ」

囁いて、倉真を連れて、その場を離れた。

まだ、残っていた人だかりに、小さく会釈をしながら、半分逃げるように改札へ向かった。

改札を出てから、利知未が思い出した。

「あ……！ 傘、忘れてきちゃった」

「電車の中か？」

まだ、気分がクサクサしている倉真が、不機嫌そうな声を出す。

「……倉真、まだ、怒ってる？」

「当たり前だ。あのヤロー、ボコボコにしても足りないくらいだ」
小さく、利知未が微笑んだ。痴漢には腹も立つが、倉真の態度は、嬉しいと思う。

「騒ぎで、すっかり忘れてきちゃったよ。……雨、まだ、降ってるね」

「……だな」

「折角、買って貰ったジャケット、濡らすのイヤだから。少し雨宿りして行こうか？」

構内の、ファーストフード店を指差した。

「そうだな。これくらいなら、直ぐ止みそうだ。一服して、気が落ち着けた方がいいかも知れネー」

「うん、行こ？」

腕を組んで、店へと向かった。

席に落ち着いて、早速タバコを吸い始めた倉真に、利知未が言う。

「倉真。一本、頂戴」

倉真から一本貰い、ライターを借りて火を着ける。

「持って来なかったのか？」

「何と無く、ね。余り、こういう格好には、似合わないかと思っ
て」

久し振りに、強いタバコを吸った。その刺激に、一瞬、顔を顰

める。

「アンマ気にした事、無かったけどな。 良く、我慢したじゃないか」

「仕事中は、吸えないから。 本数も最近、減って来たよ。 でも、気にならないって言うなら、今度は持つて出て来よう」

「また、そう言う格好してくれるって、事だよな？ もうチョイ、握力鍛えておくとするか」

「また、痴漢に遭うかも知れないから？ 守って、くれるんだ」

「それが、俺の目標だからな」

照れ臭そうな顔をする倉真に、利知未が微笑む。

「……けど、もしも子供が出来たら、タバコ、止めるよ」

「じゃあ、急いで作るか？」

照れ隠しに倉真が言つて、ニヤリと笑う。

「…意地悪だな」

利知未は少し剥れて、タバコを揉み消した。

「雨、上がったみたいだよ？」

「だな」

窓の外を、二人で眺めやる。 珈琲を飲み切つて、席を立つた。

夕食は、惣菜を一品だけ買って帰り、利知未が残り物で、レンコン金平を作ってくれた。 二人とも辛党だ。 鷹の爪、二本は使用する。

入浴を済ませてから、倉真は少し、テキストを開く。 一時間ほど勉強して、晩酌時間に倉真が言い出した。

「利知未、何時か、加藤さんから貰ったチャイナドレス、着て見ないか？」

「どうしたの？ 行き成り」

「まだ、着た所を見てなかったのを、思い出した」

今日、観て来た映画は、香港のショービスを舞台にした物だった。

晩酌をしながら、パンフレットを開いてみて、思い付いた。

「映画の影響か。…恥ずかしいな」

「男だつて、チャイナドレス着てたんだ。お前が照れる事、無い
だろ？」

「あれは、映画でしょ？ でも、今日は助けて貰っちゃったし。

…仕方ない、サービスしてあげるよ」

寝室に引っ込んで、照れ臭いながらも、始めてドレスに袖を通した。
着てみて、そのスリットの深さに、目を丸くする。

「…これ、下着、見えちゃうな」

少し考えて、下着を脱いで、恥ずかしげにキッチンへ戻る。

今夜は、ダイニングで飲んでいた。倉真はストックしてあった、

中国の酒を準備して、待っていた。

「それ、出したの？」

「気分だけ、中国旅行だよ」

「倉真、そのお酒は癖が強いつて、言っていたよね？」

「いいだろ？ タマには。それより、似合ってるじゃないか。

こつち、来いよ」

促されて、スリットから覗く足を気にしながら、おずおずと椅子へ
掛けた。

そこまでの間、倉真はニヤニヤして、利知未の足を見ていた。

「…そんな、じつと見ないでくれる？ …恥ずかしいから」

「かなり、いい眺めだな」

「これ、スリット深過ぎるよ。…下着、着けられない」

「マジで？ …ンじゃ、今、履いてないのか？」

「…うん」

恥ずかしげに頷く利知未を見て、倉真は調子に乗った。

「取り敢えず、乾杯」

ニヤケた顔を、一応は、少しは誤魔化しながら、利知未のグラスへ
酒を注いだ。グラスを合わせて乾杯をして、一気に行った。

「ちょっと飲み方、荒過ぎ」

利知未が言う。 倉真は、利知未に返す。

「その格好で、勺してくれないか？ 椅子、こっちの角へ持って来いよ？」

「どうして？」

「その方が、勺もし易いだろ？」

ニヤケた倉真に、不信な顔を見せて、利知未が移動して来た。

「ま、いいけど。 …はい」

勺をして、自分も飲む。 倉真が一口飲んで、言い出した。

「足、組んでみてくれよ？」

「どうして？」

「何時も、そうしてるだろ」

何か、企んでいるなと思う。 それでも、言われた通りにしてやった。

「椅子、そのまま、身体こっち」

やりかけて、足を下ろす。

「スケベ」

舌を出して、利知未が言う。 反対の足を、組み直してしまう。

「バレたか」

「視線、怪し過ぎ。 大体、何時も生で見てるでしょ？ そんなに楽しい？」

チラリと、スリットを捲ってやった。 太股が、ほんの少し覗く。

「お、いい眺め」

「…全く」

膨れて頬杖を付いて、そっばを向いてしまった。

「何を考えてんのか」

「刺激を求めた結果だよ」

「今更、改めて見て、楽しいの？」

「楽しいぜ？」

呆れてしまう。 倉真は手酌で、お代わりを注ぐ。 チラリと、

その満足げな表情を見て、利知未は少し、色っぽい目をして言ってみた。

「……今日は、これがイーの？」

「これがイー」

「……じゃ、ベッドまで、連れてって」

気の無い様子で、言い捨てた。倉真は言われた通り、利知未へ手を伸ばす。

「……！ ちょっと？ 倉真？！」

「このまま、連れて行ってやる」

「冗談だよ？ 本気にしないで！」

「本気にしたよ」

軽々と、抱き上げられてしまった。暴れると家具を蹴飛ばしてしまいそうだ。小さく溜息を付いて、腕を倉真の首筋に回した。

「……仕方ないな。……ドア、開けられる？」

「慣れてるからな」

タマに戯れに、この姿勢で移動する事もあった。

「今日は、気絶してないから、楽だよ」

ニヤリと笑う。利知未は真っ赤になった。何時か、リビングで失神してしまった夜のことを、倉真は言っている。

「……意地悪」

抱き上げられた姿勢のまま、倉真の肩の向こうへ、顔を隠した。

その首筋に、倉真がキスをする。弱い所だ。小さく、色っぽい息が漏れる。

「……益々、その気になって来た」

真っ赤になったまま、利知未はそのまま、寝室へ運ばれてしまった。

その夜、倉真は何時かやってみたいと思っていた事を実行した。ドレスを脱がずに、胸元のボタンだけ外して、そのまま、抱いた。

感覚的に、不自然だ。

何時もと違う刺激に、利知末もつい、盛り上がってしまった……。

身体を離してから、チャイナドレスのまま、倉真に寄り添っていた。

「中々、楽しかった」

「……何か、恥ずかしい感じだった」

「襲われてる気分って、ヤツか？」

「……そーなのかな？」

照れたまま、利知末が答える。

「あのお酒。あたしには、カンフル剤みたい」

小さく笑ってしまう。……恥ずかしいけれど、始めて失神するほどの経験をしたのも、あの酒を飲んだ夜だった。

「そーか。じゃ、切らさない様にしないと。ケース買い、するか？」

「……倉真、今日は意地悪だ。……タバコ吸お」

ベッドから降り、パソコンデスクの上に置いてあった箱から、取り出す。

「今の内に、たつぷりと吸っておいてくれ」

「なーに？ それ。妊娠宣言？」

「いや。結婚宣言」

利知末は、火を着けたタバコを一吸いして、驚いて倉真を振り向く。

「研修医、二年だよな？」

「うん。……三年目から、正勤医師になる筈」

「その頃、お前が二十七で、俺が二十六だ。丁度いい頃だろう？ だからって、医者を辞めるとは言わないけどな」

「チャンチャンコ着るまで、待っててくれるんじゃ、なかったの？」

「俺が、心配なんだよ。……お前、モテてるだろ？ 今」

利知末の手に持ったタバコの灰が、少し長くなる。灰皿に灰を

落として、改めて倉真を見る。

「……誰かに、聞いたの？」

そんな筈は、無いとは思うが、聞いてみた。

「この間、ちよつとな」

「……そっか」

もう一吸いして、薄く煙を吐き出した。

「でも、心配しないで」

言いながら、ベッドの端へ腰掛ける。

身を振るようにして、倉真の唇に、自分の吸い差しをそつと挟む。

倉真は素直に、メンソール味の煙を一吸いした。銜えタバコの

ままで、唇の隙間から煙を吐き出す。右手を上げて、タバコを摘

み直した。

「婚約者が居るって、断ったから」

小さく微笑んで、利知未が言う。

「婚約者は、言い過ぎじゃなかったのか？」

「そんな事、言った？」

「……よく言うよ」

もう一度、くすりと利知未が、笑みを漏らした。

「それでこの間、あんな事、言ったんだ」

倉真の唇から、タバコを摘み取った。後ろ手に手を伸ばして、

灰皿で揉み消す。倉真の枕元に両手を突き頬を預けて、その顔を

覗き込んだ。

暫く見つめて、唇を重ねる。直ぐに離して、囁くように言った。

「……良いよ。結婚、しょ？……あたしで良いなら」

「二年後だな」

「待ちくたびれない？」

「金、貯めなきゃならないからな、丁度良い」

「……イチゴ、着け直さなきゃ」

昼間、喫茶店で言っていた言葉を、もう一度使う。倉真が軽く眉を上げて、問い掛ける。

「それ、何なんだ？」

質問に、微笑しながら、利知末が説明をした。

「クリスマスケーキって、二十五日まででしょ？ 二十六日になると、イチゴを変えないと売れないんだって。 ……結婚適齢期に、引

つ掛けてあるみたい。 女も二十五を過ぎたら、相手を見つけるのが大変だって、事かな」

「そう言う事か。 お前はもう売約済みなんだから、関係ないだろ？」

「買い主の気が、変わらなければね」

「変わると思うか？ 大体、お前を守る男なんて、そうそう居ないだろ」

「……倉真は、ずっと守ってくれるの？」

「昼間、言わなかったか？」

「……言って、くれたけど」

「信じられないか？」

「……信じたいよ」

「だったら、信じる。 一生、守り通してやるよ」

言いながら、利知末の身体を引き寄せた。 腕の中で、利知末が小さく頷いた。

「……うん」

言葉と、頭の動きを感じて、確りと抱き締め直す。

利知末の腕が、倉真の背中へ回る。 顔を上げて、もう一度キスをした。

「……復活、して来た」

「……元気」

そのまま、利知末の身体を下にしてしまう。 もう一度、確りと抱き合った。

改めて、結婚の約束を取り付けた。

利知末も倉真も、漸く、気持ちが悪く落ち着いた感じがしていた。

利知未は、心の中で呟いた。

『これからも、ずっと。　倉真が傍に居てくれれば、頑張れる……』

倉真も、同じ気持ちだ。

『利知未が傍に居てくれるのなら、必ず乗り越えられる』

抱き合いながら、お互いの大切さを、再確認した。

倉真は思う。　これからも、ずっと。

何時か、同じ墓の下で眠る時まで。　……その先にも。

……利知未は、俺が、守り続ける。

利知未も、倉真の温もりに、その未来を実感する。

……きっと、倉真は。

約束してくれた通り、私の事を一生、守り通してくれる。

誰よりも、愛している。　誰よりも、信頼できる。

そして、これから先の未来は、きっと。

二人で同じ場所を、見つめて行けるのだろう……。

2 研修医一年・七月

2 《研修医一年・七月》

—

七月は、二人が連休で同じになる日が、二回あった。後半の連休前も一日だけ、日曜日で一緒だ。シフトを見て、倉真が言っていた。

「連休で同じなのは嬉しいが、随分、変わったシフトになってるな」
「七月、コンベンションがあるから。あたしは行かないけど、先輩方との兼ね合いで、こうなったみたい」

「ま、休みが多いのは、結構な事だ」

「けど、現時点でオペの予定も、何時もより多い見たいだな。また突発で何か起こる可能性もあるから……、来月の給料は、多いだろうな」

「手術手当で、みたいなモンか？」

「そんな所。折角、二人一緒の連休が二回もあるし。どっか泊まりで行けたら、良いかもね」

「考えてみるか？」

「そうだね」

六月最終週に倉真と、そんな会話になっていた。

七月の頭は、まだ梅雨が残っていた。休日にも、洗濯物はバスルームだ。

始めの日曜日は、二人でゆっくりと過ごした。利知未はオペの

下調べがあり、倉真も勉強、続行中だ。

「来週中頃には、梅雨も明けるって」

「漸くか。今年は、長かったな」

「そうだね。その分、勉強が進んだんじゃない？」

「色々、あり過ぎだっただろーが」

「そーだけど」

利知未の不妊症と浮気疑惑に、心を悩まされた梅雨時期だった。利知未は、倉真の態度に悩まされた梅雨だった。

「けど、頑張つて進めておいてよ？ 月末、空けておきたいし」

「まだ、何処行くとともに、決めてないだろ？」

「それでも行くの。そのつもりで、考えておいてよね？」

可愛く笑顔を見せて、お願いしてみた。倉真は乗せられてしま
う。

「んじゃ、気張るか」

「頑張れ！ 珈琲、淹れて来るよ」

「頼む」

医学書を閉じて、利知未がキッチンへと出て行った。

梅雨が明け、始めの休日は平日だ。利知未は思い立って、今ま

での写真の整理を始めた。その為に、普段は手につけない荷物を
引っ張り出す。

「物、増えたな……」

リビングの開きスペースに広がった、細々とした物たちを眺めて
呟く。

「どうせ、アルバムも買って来ないと駄目そうだし……。決めた
！」

一端、荷物をダンボールへ収め直して、買い物へ出掛けた。

久し振りに下宿へ連絡を入れ、里沙に車を貸してもらう約束をす
る。

その日、利知未はアルバムと、木目調の小さな棚を新しく購入し
て来た。

部屋の整理と写真の整理で時間を取ってしまったので、夜はカレーにしよう事にした。

『倉真、カレーも好きだって、言ってたし。煮込んで置けば良いし』

合い間に夕食の準備をこなしながら、部屋を片付け、落ち着いて写真の整理を始めた。二人で住むよりも、ずっと前からの物だ。

下宿時代、里真が良く撮っていた。カメラ嫌いの利知未だが、流石に6、7年分も集まれば、結構な量になる。アルバム三冊分、溜まっていた。

勿論、倉真の写真もある。同じ写真も、何枚か出て来た。年代順に並べ直して、一組は封筒に入れ、新しい棚の中へしまった。

『……何時か、倉真のご両親に、渡して上げられれば良いよね？』

倉真が家を飛び出して、もう7年以上だ。

恐らく、ご両親はその間の息子の様子と成長を、気にされているのでは無いだろうか……？

自分は、家を飛び出したと言う訳でもない。母親とは折り合いが悪いなりに、時には手紙のやり取りくらいはして来ている。

裕一の法事で、顔を合わせた事だってあった。最後に母と会ったのは、裕一の七回忌の時だ。あれから、更に四年半の月日が流れている。

次の十三回忌は、一年半以上も先だ。

『……その頃、あたしはもう、結婚してるのかな？』

予定通りであれば、微妙な年だ。……子供は、出来ているのだろうか？

七回忌の法事後、優が言っていた。

「兄貴の歳を二歳も越えて、三歳になる娘を持って、漸く、兄貴に
少しかけ近づけた気がする」
そう言っていたのだ。

自分も結婚して子供を持ったら、裕一に少しは近づけるのだろうか……？ それ以上に母として、自分の母親に対する理解は、生まれてくるのだろうか……？

そこまで思つて、首を振る。

『あたしは、あの人のようには、成りたくは無い』 では、どう
なりたいのか？

その目標として掲げる母親象は、美由紀だろうか？ 智子だろうか？
明日香だろうか？ ……それとも、倉真の母親だろうか？

まだ、会った事はないが、自分が愛した男を、この世に産んで育
ててくれたその人には、感謝に似た思いも感じている。

『だから、何時か。この写真、必ず倉真のお母様に、渡してあげ
たい……』

そつと、封筒を仕舞った棚を眺めた。

改めて写真を眺めながら、アルバムに整理をして行く。それな
りに、楽しくなつて来た。昔の倉真の写真を見て、懐かしいモヒ
カン頭と対面した。

「この頃、まだ、倉真この頭だったんだ……！」

まだ、今よりも少し、あどけないかも知れない。可愛いと思う。
隣の自分を見て、男っぽい姿に、改めて愕然とする。

「こんなだったんだよね、あたしも……」 呟いて、次の写真を
手に取り、笑ってしまった。

「ただいま」

玄関から倉真の声がして、利知未は写真を見ながら、声を掛けた。

「お帰り！ 倉真、チョット来て見て？ 懐かしいよ」

キッチンへ入り、扉が開いたままの、リビングを覗く。

「何してるんだ？」

利知未は手を止め、一枚の写真を倉真に見えるように、差し出す。

「アルバム買って来て、写真、整理してた。したら、こんなの出て来たよ？」

倉真は写真よりも、筆筒の隣の物入れに注目していた。

「で、カラーボックスも増えた訳だ」

「片付かないからね。最近、物が増えて来たから。ね、懐かしいよ」

上着をソファの上に置きながら、利知未が見せている写真を手に取った。

「こりゃ、里真ちゃん達と、キャビン行った時のか？ ……確かに」

自分の、その頃の頭を見て、少し恥ずかしい感じがした。

『俺も、歳食ったって、事か』

あの頃は、これが格好良いと思い、ポリシーを持っていた筈だ。

恥ずかしいと言う感想が、自分の心に浮かんで来た事に、年齢を実感した。

「これ、集合写真の後の、一瞬だよ。こんなに上の方までくし上げて、絞っていたんだ」

利知未は、くすくすと笑っている。

「ちよつと、ドッキリショットだったな」

「そう？ この頃は、本当に男みたいだったから。あんまりドキリもしなかったんじゃないの？」

「…でも、無かったよ」

「物好きだな」

言いながら、少し赤くなってしまった。

「何とでも言ってくれ。 ゆっくり眺めていたいが、腹へって、死にそーだよ」

「あ、そうだよな、ごめん。 つい夢中になっちゃった。 直ぐ、用意するね」

写真をアルバムの上において、キッチンへ出て行った。

「カレーだけど、良い？」

「好物だよ」

「つて、言ってたよな。 お風呂、準備出来てるよ。 先に入っち

やえば？ その間に温め直しておくから」

「そーするか。 着替え、上だよな？」

箆笥に手を掛け、呟く声に、利知未が反応する。

「いいよ、出しておくから」

「…頼む」

素直に甘える事にした。 何時か、上から順番に引き出しを開けていた時より、事情が変わっていた。 倉真の引き出しに裕一のお古が増えた関係で、中身は移動済みだった。 真ん中の引き出しは、現在、二人の共通になってしまっている。

倉真が入浴を済ますまでに、カレーを温めて、サラダの仕上げに掛かった。

食事の途中、倉真が言う。

「キャビンに行った時も、カレーだったよな」

「そうだったね。 写真見て思い付いた訳じゃ、無かったんだけどふと、思い付いて、倉真が提案をした。」

「月末の旅行、あそこへ行くか？」

「鳩ノ巣溪谷？ …良いかも知れない。 丁度、蛭の時期だね」

「ギリギリな。 思い出の溪谷、行きたくなかったよ」

「でも、今からじゃ、予約取れないかも」

「キャビンじゃなくても、良いだろ？ キャンプ場は、まだ空きが在るんじゃないか？」

「かな？ 判った。明日、遅出だから、仕事の前に問い合わせるね」

「任せた」

「任せられた」

笑顔で請け負った。利知未も、あの思い出の場所に、行きたくなっていた。

「準備は、俺がするよ」

「そうだね、休みの日とか使って、宜しく」

「おお」

それから、あの頃の思い出を話しながら、夕食と晩酌を済ませた。

翌日、利知未はアパートを出る前に、キャンプ場の管理会社へ連絡を入れた。あの頃の資料の一部が、写真と一緒に出て来ていた。

予約状況を確認して、キャビンも一応は空いている事を知る。けれど、二人にあの広さは、金額の面から言っても無駄がある。

テント広場は大丈夫だと聞いて、予約だけしてしまった。メモにその事を書き残して、利知未は仕事へ向かった。

帰宅してメモを見つけた倉真は、小さくガッツポーズをする。

『丁度、いいな。……あの場所で』

エンゲージリングを、利知未へ渡したいと思った。

二

間の日曜日は、月末の準備をするため、二人で出掛けた。倉真が、今度はバーベキューをしたいと言いだしたので、今から

揃えられる物だけ、購入しようと話す。ボーナスも出た。いつその事、一式揃えるのも、良いかも知れないとも思ったが、余分な金は、貯金に回すに限る。

倉真が昔、鼻屑にしていたレンタル屋で、借りて来てくれる事になった。

買い物の途中で、倉真がシルバーアクセサリーの店へ足を向ける。昔は、ヘビイメタルやパンクロックを好んでいた倉真だ。ライブにも足げく通っていた頃がある。その手のアクセサリーは、今も何点か持っている。

特に不審に感じる事も無く、利知未も倉真の後へ続いて店へ入った。

「何か、良いのあった？」

「あの辺りの、どうだ？」

倉真がペアリングを指差して、利知未に言う。

「倉真は、ああ言うのが好き？ …… あたしは、その隣のが好いかな？」

二人でリングを眺めていると、店員が近寄って来た。

「ケースから出して、ご覧になりますか？」

「お願いします」

倉真が答える。店員が幾つかのペアリングを、ケースから出してくれた。

「これが好きかな？」

利知未は出されたリングを二、三、右手の薬指や、人差し指、中指に取つかえ引つかえして、嵌めてみる。倉真は、そのサイズに注目していた。

右手の三本は、10号から12号くらいだ。左手は、恐らくそれより1号分は細いと見る。試しに9号の指輪を見つけて、渡してみた。

「これ？ 多分、左手サイズこうちだな」

利知未は素直に、その指輪のサイズを確かめ、左の薬指へ嵌めてみた。

「ここだと、チョイ大きいな。中指だと丁度くらいかな？ うん、ぴったり」

嵌めた指を倉真に見せて、問い掛ける。

「倉真は、これが好きなの？」

「それも、嫌いじゃないけどな」

大き目のクロスを模った物だった。利知未は少し眺めて、幾何学模様の掘り込まれた、それよりは少しシンプルな物を選ぶ。

「あたしは、これが好きかな？」

「それも良いな」

「これ、10号ありますか？」

店員が、同じデザインのリングをケースから取り出す。

「こちらですね」

それを受け取り、嵌めてみた。

「倉真なら、何処につける？」

「これなら、右の薬指か？」

「サイズは？」

「15か16だな」

男性用のリングを手に取り、倉真の右の薬指に嵌めてみた。

「良いんじゃない？」

「そうだな」

「じゃ、あたしも右の薬指だ」

ニコリと笑って、左の人差し指から、右の薬指へ付け替えた。リングの着いた手をケースの上に並べて見て、満足そうな顔をする。

「買ってつちやおうか？」

「良いんじゃないか」

「ペアで、おいくらですか？」

「こちらは、一万二千八百円の商品です。只今、キャンペーン中ですので、20%割引になりますので…、一万二百四十円ですね」

電卓を叩いて、店員が笑顔を見せる。

「俺が出すよ」

「じゃ、半額、宜しく」

二人で折半して、一人・五千百二十円ずつ、出し合った。利知未に声を掛けられて、店員がレジに向かう。

「ケースは、どうしますか？」

「一応、持って来ます」

会計を済ませて、買ったばかりのリングを着けたまま店を出た。

倉真は、利知未が先に店を出るのを見て、店員に再び近付いた。

「彼女の左の薬指、9号でしたよね？」

「少し、大きめでしたから、8号で大丈夫だと思いますよ。頑張って下さいね」

店員が微かな笑みを見せる。倉真は激励されてしまった。

『判るもんなのか？』

これで彼女の指のサイズを測る男は、意外と沢山、居るのかも知れない。

少し、照れ臭い思いをした。

倉真は、利知未の指のサイズを確かめて、いつかの宝石店で、エングージリングを買おうと思っていた。

買った物をしたビルの6階に、イタリアンレストランがあった。

用事を片付け、夕食を済ませてから帰る事にした。

「チョット、余計な出費しちゃった？」

席に落ち着き、利知未が指輪を眺めて倉真に聞く。

「ボーナス出たんだから、良いんじゃないか？」

「自分への、ご褒美って所か。…初めて、ペアのアクセ買ったね」

「そうだな、手頃じゃないか？シルバーなら、俺も着けるし」

「いくつか、持ってたよね。…何か、幸せな気分だよ」

利知末の嬉しそうな笑顔を見て、倉真も幸せな気持ちになった。

それから食事をしながら、月末の話をする。

「バーベキューは、食材切って行っちゃえば良いけど、問題は朝ご飯だな」

「また、釣りでもするか？」

「倉真、嫌いでしょ。それに、あたし達二人じゃ心許ないな。

樹絵でも居れば、話は別だけど」

「そーいや、上手かったよな。双子で揃って」

「秋絵は、意外だったな」

「性格的には、納得だけだな。樹絵ちゃんは、元気でやってんのか？」

「手紙も無いけど。便りが無いのが、良い知らせて言うし、頑張ってるんじゃないかな。樹絵は結構、根性あるから」

「それも、そうだ」

「そう言えば、あのキャビンの夜から妙に仲良かったよね、倉真と樹絵。あの時、何かあったの？」

「それは、焼き餅か？」

利知末の質問に、倉真がニヤリと笑う。照れ臭くなって、利知末は膨れる。

「……な訳、ねーだろ」

照れ臭いのを誤魔化す為と、少し怒った利知末が、懐かしい言葉使いになる。それは、利知末の癖らしい。面白いと思う。

「戦友ってヤツに、なったんだよ。あの時」

「戦友？ 何だ、それ」

「その内、話すよ。……言葉、昔に戻ってるぞ？」

くすくすと笑っている。利知末は少し、赤くなってしまった。

「……ま、イイけど。……焼き餅、焼かれないの？」

「これ位の焼き餅は、可愛いと思うぜ？」

益々、照れ臭くなってしまった。誤魔化すために、また剥れてみせる。

「いいよ。もう、焼かないから」

「それは、寂しいな」

「じゃ、どうして欲しいの？」

「適当に焼いてくれ」

「我が俤」

「俺は、昔から我が俤だ」

倉真は小さく笑みを見せながら、タバコに火を着けた。

今の倉真を見ると、昔のヤンチャが随分、なりを潜めている気がする。

最近、利知未は倉真が年下である事を忘れてしまう。

『昔は、どうしようもない、弟分だったんだけどな……』

自分の為に、大人の男らしく成ろうとしている倉真を、愛しいと思う。

「さつき剥れてたのに、何、行き成りニヤけてるんだ？」

「良いでしょ？ 別に。 倉真、変わったと思ったただだよ」

「そーか？ 相変わらず、馬鹿やってるぜ」

「一緒に住んでも、こうして過ごす事が少ないから、見えないよね」

「また、バカなガキに戻るか？」

「家出でも、する気？」

「…それは、出来ないな」

「どうして？」

「お前の飯が、美味過ぎるからな。 腹が減ったら帰っちまう。

家出にならネーだろ？」

「今日も、何か作れば良かった？」

「偶にはサボらネーとな。 …何時もサンキュ。 今日、俺が奢るよ」

「ありがと」

利知未の表情に、照れ臭くなってしまうた。

「すっかり、餌付けされた犬の気分だよ」

「照れ隠し？」

「ほっとしてくれ」

今度は、久し振りに倉真の幼い表情を見た。小さく笑ってしまった。

食事を済ませて、帰宅した。

その翌週、倉真は忙しかった。

仕事の後、一日は、宝石店へ向かう。いつかの店員に相談して、ダイヤのリングを購入した。

それから勉強の合い間に、月末の準備を、少しずつ片付けた。

思い出の溪谷へ出掛けるのは、もう次の土日だ。保坂に頼んで、当日は車を借りる事にした。

「泊まりで出掛けるのか、羨ましい」

「アンマ、アイツと休み合う事、無いからな。車、ありがとう」

「ざいます」

「事故だけは、起こしてくれるなよ？」

「十分、気を付けます」

「その内、おれにも女、紹介してくれ」

「言われて、目を丸くする。」

「いつかの電話の、彼女だろ？一緒に行くの。お前の恋人も見

てみたいが、おれにも彼女が必要だよ」

保坂はニヤリと笑って、倉真の背中を叩いて、行ってしまった。

『そりゃ、バレるか』 妙に、納得してしまった。

利知未の事は、まだ誰にも話しては居ない。

けれど、何時も就業後、真っ直ぐに帰宅して行く倉真を見て、社内

の仲間は全員、薄々は感付いている。

倉真は、キッチンとプロポーズを済ませてから、改めて仲間に紹介しようと思い始めた。

そして、あつと言う間に、週末はやって来た。

三

翌日の相談をしながら、早めに晩酌をした。

「明日は、俺が運転してくよ」

「長距離だし、途中で交代するよ？　八王子バイパス手前位で、丁度、真ん中でしょ？」

「間の休憩を、長めに取れば平気だろ」

「倉真の運転する車、初めて乗るな。大丈夫？」

「何がだよ」

「何時もバイクばかりだから、危ない運転、しないでね」

「それでも、仕事中はチョコチョコ乗ってるんだ。客の車を運転する事もあるんだから、平気だよ。お前より、よっぽど安全運転だと思うぞ？」

「そんな、荒い運転、した事なかったと思うけどな」

利知未が少し膨れる。倉真は、その表情を見て小さく笑う。

「ガキみたいな顔になるよな。膨れると」

この前のように、利知未の頬を、突いてやった。

何時ものように、倉真の身体に背中を預けて寄り掛かっていた。肩に掛かった手の指で、頬を突かれて、そのまま頭を抱き寄せられてしまう。

「お酒、零れるよ」

「邪魔なモノは、排除だな」

一瞬身体を離して、利知未のグラスをテーブルの上に置いた。改めて、その頭を抱き抱えるような姿勢になる。 改

頬をその胸につけて、利知未も素直に抱き締められていた。

「……マジ、結婚、しような」

ふいに、倉真が呟く。

「……うん。長く待たせちゃうけど、ごめんね」

小さく頭を頷かせ、利知未が小声で謝った。

『エンゲージリング、忘れないようにしないとな』

利知未の返事を聞いて、倉真はそう思った。

夜、寝る前。 倉真は指輪を、翌日、着て行くベストのポケットへ入れた。

翌朝、利知未は倉真よりも、二時間近く早起きをした。

まだ五時前だ。 昼食用にサンドウィッチを作り、水筒へ温かい珈琲を入れる。 それから、バーベキュー用の食材を準備した。

六時半を過ぎてから、倉真が大欠伸で起き出して来る。

「もう、起きてたのか？」

「おはよう。 八時前には出たいからね。 朝ごはん出来てるよ、

顔洗って来て」

「おお」

再び大欠伸をする。 寝ぼけ眼の倉真を見て、利知未は微笑む。

『寝惚けてる時と眠ってる時は、やっぱり子供みたいな顔に成るな』 自分も、そうなのかも知れないと思う。 けれど倉真の姿を見て、

それが可愛く感じてしまう。 母性本能が反応するのも知らない。

『けど、子供や弟じゃなくなつて、未来の、旦那様って事だよな』

昨夜も、その言葉を聞かせてくれた。 幸せな気分浸つてしま

う。

朝食を済ませて、最後の準備と、車への積み込み作業を終え、予

定通り八時前には出発した。

途中のファミレスで、小一時間程のんびりと休んだ。それでも十時半過ぎだ。ここから後、一時間半も走らせれば、思い出の溪谷へ到着する。

倉真は何度も、ベストのポケットに入った指輪の箱を、服の上からそつと確かめていた。

「後、一時間半。倉真、大丈夫？ 眠くない？」

再び車へ乗り込んで、利知未が倉真に聞く。

「俺は良く寝たからな。お前、眠いんじゃないか？ 寝て行つていいぞ」

「そうだね、チョット睡眠不足かも。眠っちゃうと思う」

小さく欠伸をして、利知未が眠そうな、トロンとした瞳になる。その目が可愛くて、つい、瞼の上にキスをしてしまう。

「寝とけ」

「うん。……良く、眠れるかも」

助手席のシートを軽く倒して、利知未はもう一度、欠伸をした。

利知未がトロトロとしている間に、思い出の溪谷へ車が差し掛かる。急なカーブの揺れに、まどろみから、ふと目覚めた。

「……ん、ここ……？ あ、もう、御岳だね」

丁度、JR青梅線の井沢駅前だ。五年前、この駅前にバイクを止めて、楓橋を目指して歩いた。

「良く寝てたな」

「うん、良く眠れたよ。あと、少しだね」

「二十分も、掛からないだろうな」

「じゃ、起きてよう」

そのまま車窓から、溪谷の眺めを堪能して行つた。

「禁煙車じゃ無いんだ」

灰皿が開いていて、4、5本、倉真の吸殻が覗いていた。

「保坂さんも吸うからな。返す時には、綺麗にして返すよ」

「じゃ、あたしも目覚めの一服でも、させて貰おう」

ポケットからタバコを取り出す。火を着けて、景色を眺める。

静かに煙を燻らした。

「中々、止められないな」

「まだ、子供が出来た訳じゃ無し、良いんじゃないか？ 随分、減ったよな」

「前の、三分の一位にはなったかな？ 一箱、三日は持つよ。：

こう言う、絶景を眺めながらの一服は、やっぱ、美味い」

昔の言葉使いに戻って、少しだけ、少年チックな笑顔を見せた。

タバコを吸い終え、改めて運転席の倉真を見てしまった。4W

Dの車内は、普通の乗用車よりも天井が高い。それでも背の高い

倉真には、少しだけ窮屈そうに見える。タバコを銜えたので、利

知未が火を着けてやった。

「サンキュ」

唇から煙を薄く吐きながら、倉真が礼を言う。溪谷のカーブは、

少し緩やかになった。

それから十分もしない内に、鳩ノ巣溪谷キャンプ村の駐車場へ、車が滑り込んだ。

到着して、先ず始めに昼食を済ませる事にした。まだ十二時だった。

朝から準備して来たサンドウィッチと水筒だけ持って、あの集合写真を撮った河原へ、歩いて行った。

腰を下ろして、弁当を広げて倉真が驚いた。

「よく、そんな時間あったな」

「時間は作る物。睡眠時間を削りました。感謝してね？」

「海より深い感謝の思いで、戴くとするか」

「そーして。 はい、珈琲」

「サンキュ」

「けど、お陰で寝不足だったから、良く眠って来ちゃったよ」

珈琲を渡して、利知未が大きく伸びをする。

「良く眠れるくらいの安全運転だっただろう？ ……美味しい」

「見直しました。 量、足りる？ 食パン二袋、使ったけど」

「大丈夫だろ。 これ食ってエネルギー充電したら、テント張っちまわないとな」

「任せるよ。 勿論、手伝うけど」

「益々、見直して貰うとするか」

「期待してる」

話しながら、食パン二袋分のサンドウィッチは、どんどん倉真の腹へと収まって行く。 利知未も慌てて手を伸ばした。 三分の二以上、倉真が平らげてしまった。

「耳がない分、量が入る」

「呆れちゃうくらいの食欲だな。 耳は冷凍庫に入ってるから、帰

ったらクルトンにでもしちやおう」

「クルトンって、カップスープの中に入ってるヤツか？」

「そう。 食パンの耳、小さく千切ってトースターでカリリと焼けば、クルトンの出来上がり。 シーザーサラダの上に乗っけたり、シチューの時、入れて食べれば良いでしょ？」

「流石だな、無駄がない」

「甘いもの好きなら、油で揚げた耳に砂糖を塗して食べれば、お八つになるんだけどね。 あたし達じゃ、無理でしょ」

「確かに」

「あの、水浴びしてる小学生くらいなら、喜んで食べてくれるかな」
少し離れた場所で、小学生が水遊びをしている。

「懐かしいな……。 あの辺りで、集合写真撮ったよね」

「丁度、あの辺だな」

倉真もそちらを眺めた。

「あのね、倉真」

「ん？」

「あの時。……花火をしてる時、樹絵に呼ばれて、ベンチから、あたしを引っ張って行つたよね？」

「そうだったな」

「倉真の力が、凄く強くなっていて、実は、ちょっと戸惑った」
先週買ったペアリングを嵌めた右手首を、愛しげに擦る。

「あれが、切っ掛けだった。……倉真の事、一人の男として見始めた」

照れた笑顔を倉真に向ける。

「だから、あたしにとっても、この場所は思い出の場所」

「……俺も、同じだよ」

照れる利知未が可愛くて、肩を引き寄せた。そのまま寄り添って水面を眺めていた。

魚の腹が、チカリ、チカリと、陽光を照り返している。

暫くして、利知未が言う。

「そろそろ、行こうか。夕飯のバーベキューの、準備もあるし」

「そうだな、早めにテント張っちまおう」

倉真が立ち上がり、利知未に手を貸した。素直にその手を掴んで、立ち上がった。

駐車場の脇に管理小屋がある。戻ってチェックインをするついでに、台車を二台、借りて来た。車から、設営道具と、荷物を下ろして、台車へ積み直す。

倉真が借りて来たテントは、二人〜三人用のドームテントだった。ロジテントの設営道具よりは、コンパクトだ。それでも、利

知未が思った以上の大荷物で、台車を押しながら、息が切れそうになる。

テント村へ到着すると、場所を決め、大きな石を片付け始めた。利知未も手伝い始めると、倉真が軍手を渡してくれた。

「外科医が指の怪我したら、大変だろうが。やらなくて、構わないぞ」

「ありがと、気を付ける。けど、手伝うから」

ニコリとして、軍手を嵌めて作業を再開した。

言い出したら聞かないのは自分と同様、分かり切っている。倉真は心配しながら、なるべく危なくない事を選んで、指示をする事にした。

二人が手際よく設営していく様子を、そろそろ白髪も目立ち始めた年頃の、紳士が眺めていた。

「なかなか、慣れたもんですな」

ペグを打つ倉真を見て、紳士が声を掛ける。

「え？ ああ、昔から、ちよつとやってたんで」

照れ臭そうな笑みを見せながら、作業を続ける。

設営は、倉真の指示で、すばやく確実に進んでいた。

「上手いものだ。後で、お茶をご馳走させて貰えませんか？ 私のテントは、あのロジテントなんですが、話し相手が欲しい所でした」

「いいですね、良ければ、お邪魔します」

昔、一人でテントをバイクの後ろへ積んで出掛けていた頃から、旅先での交流は、積極的に持つて来ていた。笑顔で答えて、利知未へ指示を出す。

「利知未、そっちから、固定できるか？」

「分かった。あれ？」

「大丈夫か？」

「私が、見て来ましょう」

「済んません、お願いします」

ゆつくりと設営途中のテントを回りこんで、利知末の傍らへしゃがみ込んだ。指を指し、教えてくれる。

「ここ、かな？」

「そう、そこです。ポールを確り支えないと、テントが崩れてしまいます」

「え？ あ、有難うございます」

利知末も笑顔で礼を言う。

利知末は、紳士に教えて貰いながら、倉真と協力して、立派にテントを組み終えた。

「やった！ 完成！」

「お疲れ様。これなら、台風が来ても、きっと平気ですよ」

紳士は冗談を言いながら、手を叩いて利知末を労ってくれた。

荷物を整理して、一時間後、利知末と倉真は、ロッジテントへお邪魔した。

ロッジテントでは、紳士の奥さんが笑顔で迎えてくれた。

「丁度、お三時の時間ですね。対した物はありませんけど」

ダッチオーブンで焼いたカウボーイブレッドに、色々なジャムを挟んでお八つ風にアレンジした物を、紅茶と一緒に出してくれた。

「今朝、作り過ぎてしまったから。明日は明日で焼かないと、硬くなってしまうでしょう？」

「テント設営で丁度、小腹が空いてた所です。戴きます」

倉真が笑顔で礼を言う。

「お昼、あんなに食べてたのに。もうお腹、空いてたの？」

利知末が呆れ顔で倉真に言った。

「そんなに沢山、食べてらしたの？」

「食パン一袋半が、彼のお腹に納まりました」

呆れたまま笑顔で、奥さんの言葉に利知未が答えた。

「まあ。けど、それだけ大きな身体をしていたら、栄養も人一倍必要なんでしょうね」

コロコロと笑っている。利知未は、この婦人が好きになった。

上品で優しい雰囲気の人だった。ダッチオーブンを使って美味しいパンまで焼けるのだ。料理の腕も、きっと素晴らしいのだろう。

自分の母親もこんな人なら良かったのにと、心の奥では呟いていた。「家内も始めて連れて来た時には、中々、解りませんでね。苦労したものです」

紳士は奥さんの入れた紅茶を飲みながら、パイプを銜えている。利知未は大叔父を思い出した。

『……じいちゃんも、パイプだった』

良く、銜えパイプで、利知未をモデルにして絵を描いていた。

「私は、この人が言っている事が全然、解らなくて。怒らせてしまったのよ。手先もそれ程、器用な方ではなかったから。貴女は随分、手先が器用みたいだって、さつき主人に聞かされましたよ。お前ももう少し器用だったら、あの頃も楽だっただろうにっつて」少し、旦那に対する当て付けが入っている様だ。仲が良いのだと思った。

「旦那さんに色々、教えて頂きましたよ？ だから出来たんです」

「あら、若くて綺麗なお嬢さんには、お優しいのね」

「おいおい、この歳になって、焼き餅もないだろう？ 娘みたいな年頃だよ」

「おいくつ、何ですか？」

「五十六に成ったばかりだ。身体が利かなくなる前に、のんびりと過ごしたいと思ってね。子供達には振られてしまったよ」

「お子さんは、おいくつ何ですか？」

「息子が二十三歳で、娘が二十歳よ。息子は仕事が忙しくて、休みが取れなかったの。娘は、大学のお友達の方が大切みたいで」
仕方ないわね、と、言いたげな雰囲気だ。

「家は、遅くに出来た子供達だったから、随分、可愛がつて来たんだけどね。年頃と言うヤツで、どうしようも無い」

少し、肩を竦めて紳士が言う。

「貴女たちは、新婚さん？」

婦人に言われて、倉真と目を合わせた。微かに笑みを見せ、利知未が言う。

「…まだ、一年と一寸です」

嘘をついた。同棲と言う響きは、あまり良い印象ばかりでも無さそうだ。

「そう。じゃ、まだホヤホヤなのね。一番、幸せを感じる時期かしら？」

「ええ、そうですね」

これは、嘘とは言い切れない。大問題も片付き、今、二人は幸せだと思う。

倉真は話を合わせるのも照れ臭くて、紳士と話を始めた。

「そう言えば、名前も聞いてなかったつすね。俺は、館川です」

「おお、そうでしたね、私は、山内 孝夫と申します。家内は敏子」

「倉真です。館川倉真」

「奥さんは？」

問われて、やはり恥ずかしくなる。利知未は笑顔で答えている。

「利知未です。…お二人は、ご結婚が遅かったのですか？」

「結婚は、人並みだったんだけど。ただ、中々、子供に恵まれなくて」

そして、小さな声で利知未に耳打ちをした。

「二人とも、キャンプで出来た子供達でした」

ニコリとして、更に言う。

「館川さんも、今夜で恵まれるかも知れませんか」

利知未は赤くなってしまった。その様子を見て、倉真が首を傾げる。

倉真は、山内氏と話をしていた。

「家は、姉さん女房だね。普段は頭が上がらないんですよ。こうしてキャンプに来た時だけは、偉そうにしていられる」

冗談なのは解る。相槌を打つ倉真に、婦人が言う。

「本気にしちゃ駄目よ。家でも、何時も威張り散らしてますから」首を竦める主人を見て、笑顔になる。

「子供が出来たら、忙しくて、とても、とても、ゆっくり何てして居られないから。今の内に十分、二人の時間を楽しんだ方が良いわよ」

「そうですね、そうします」

それから話が盛り上がって、夕食まで一緒に済ます約束をした。

利知未たちは一度テントへ戻り、バーベキュー道具を運んで来た。それから四人で楽しい夕食時間を過ごした。

利知未は、ついでに奥さんからいくつか、料理と酒の摘みのレシピを教えて貰った。

バーベキューの後片付けを済ませ、山内夫妻と温泉へ向かった。のんびり浸かっているからと言われて、一足先に風呂を上がり、螢狩りへ行く事にした。入浴中も其々、男同士、女同士で話が弾んだ。

利知未は、山内夫人が自分の娘と接するように接してくれていた事に、心から感謝をした。背中の流し合いもした。夫婦の仲の良いエピソードも、沢山、聞かせてもらった。

子育て中の話は、特に興味深かった。

「昔は、家族で良くキャンプへ来ていたのよ。主人の道楽だから、子供達もすっかりアウトドア通に育ってしまったわ。私の方が付いて行けない位」

「それくらいの方が、いいと思いますよ。いざと言う時、困らないでしょう」

「そうね、その点は主人の手柄だと思います。館川さんも、ご主人、お好き見たいだから。何時かお子さんが出来たら、家族共同キャンプにお誘いしてもいいかしら？」

「そうですね、私の仕事の関係で、あと二、三年後になりそうですけど。そうになったら、是非」

山内夫妻と利知未たちは、一晚のキャンプで仲良くなれた。

倉真も、物分りの良い親父と過ごしている気分になった。

『うちの親父とも、これ位、気楽に付き合えればな』 そう思う。こちらの良い気分になった山内氏から、姉さん女房の扱い方についての、薫陶を貰ってしまった。

湯船に浸かりながら、山内氏の言った言葉は倉真の心に残った。

「三十年、色々あったが……。私は敏子と結婚して、心から良かったと思っています」

いつか自分もその言葉を言える時が来ればいいと、心から感じた。

四

ポケットの指輪の箱に、そつと触れる。

今、倉真は利知未を右腕にぶら下げて、あの思い出の場所へ向かっている。

「ここ、花火した所だね。今年もやってる」

他のキャンプ客が、子供達の嬌声を響かせ、炎の花を咲かせている。

「花火のベストポジションだな」

「お父さんと、お母さん達は、あのベンチで眺めてるのかな？」

「そうかもな」

始めて倉真の力強さを感じたあの場所で。 利知未は、絡めてい

た腕に力を込めた。

「……こうして歩いてるなんて、あの頃は思っても見なかった未来の姿だ」

くすりと小さく笑う。

『俺は、いつかはと思っていたけどな』

心の中で呟いて、口では別の言葉を返す。

「あん時、まだ俺は、十九だったな」

「あたしが、二十歳。…歳、取ったな」

「まだ、早くネーか？ その感慨は」

「だって、あの頃はまだ学生だったし。 倉真もバイトだったね」

「バイク便は楽しかったぜ？」

「今の仕事は楽しくないの？」

「楽しいとか、そう言う次元じゃネーな。 好きな事だから、遣り

甲斐はかなり感じてるぜ」

「ただ、バイク便の頃みたいな感じは無いんだね」

「そりゃ、そうなるな。 お前は、医者として働き始めて、どう感じてるんだ？」

「……遣り甲斐は、あるよ。 けど、大変。 まだ難しい症例に合った事は無いけど。 そう言うのは、先輩が引き受けてくれるから」
「そんなモンだよ。 ……けど、凄いと思うよ」

医者になれるヤツが、そうそうゴロゴロしている筈は無い。 何より利知未の周りに居た連中は、自分も含めて、勉強からは足が遠い奴らばかりだ。

「裕兄の、お陰かな……？　今は、倉真のお陰」

「そう言って貰えると、嬉しいよ」

利知末の最愛の兄、裕一。その姿を追い越す事は、難しいと思う。

「自信、持ってよね？　今、あたしが一番大切なのは、倉真なんだから」

「…俺も、同じだ」

倉真の短い返事に、喜びを感じた。　益々、ピタリと寄り添った。

このキャンプ村は、何処も彼処も懐かしい。

二人は寄り添い歩いたまま、思い出の、蛍の小道へ踏み込んだ。

「五年振りだけど、今年も、見事だね」

蛍の仄かな光が、呟く利知末を益々、綺麗に見せていた。

「そうだな」

腕を組んだまま、道を進む。　河原へ降りて腰を下ろした。

「……あの日、この蛍の光を見ながら、泣きそうになったよ」

マスターへの想いを、浄化させなければならないと、必死だった。

これからは自分が仲間達を守って行こうと。　そうする事で、彼に対する想いを塞ごうと、決心した夜。

「……それでも、泣かなかったよな。　お前は」

「秋絵もいたし。　倉真も、居たでしょ？　……あの頃は、まだ倉真たちの事、弟分として守って行こうって、考えてたから。　……」

今は、倉真に守られっぱなし」

小さく笑顔を見せる。　その横顔に、見惚れてしまう。

「守らせて、貰ってる感じだな」

「そんな事、無いよ？　今、倉真が居なくなったら……。　あたしはきつと、ボロボロになっちゃうと思う」

利知末の身体を引き寄せる。　寄り添って、倉真が呟いた。

「約束、ちゃんとしよう」

「約束？」

「俺が、一生お前を守る約束だ。……利知未、渡したい物がある」
肩を抱いたまま、ベストのポケットから、片手で指輪の箱を取り出した。指で蓋を跳ね上げる。

利知未の目の前に差し出した。

「……これ？」

「婚約指輪。本当は、結納とかする必要があるかも知れないけどな。……俺達の場合は、事情があるだろ？ お前の母親、まだニューヨークだよな。俺も、格式ばったのは苦手だ。……両親とも、何年も顔を合わせていない」

「……うん」

「受け取って、くれるか？」

嬉しさで、利知未の頬が赤くなる。照れた笑顔で頷いた。

「ありがとう。……指に、嵌めてくれる？」

言いながら、倉真と改めて体を向かい合わせた。

左手を、そつと差し出す。

「何か、照れ臭いな」

倉真の眩きに飛び切りの笑顔で、行動を促す。

「はい」

指を軽く開いた。

その左手を取り、倉真は指輪を、利知未の薬指へ嵌めた。
手を、目の高さに上げて、利知未は目を丸くする。

「凄いな。サイズ、ピッタリだよ」

「当たり前だ。誰が、用意したと思ってるんだ？」

照れ臭くて、少し威張ってみる。くすりと笑って、利知未が言った。

「倉真。……愛してるよ。これから、ずっと……」

「絶対に、幸せにする」

「うん。 …… 信じてる」

見つめ合い、唇を重ねる。

蛍の光が、二人の周りを、飛び交っていた。

指輪を受け取って貰って、倉真の気が、少し抜けてしまった。

一息ついた表情を覗き込んで、利知未が言う。

「これで、本当のフィアンセだ。 …… 良かった。 倉真で」

「俺は、気が抜けた。 ギリギリまで、断られたらその指輪をどうしようか、これでも悩んでた」

「あたしが断る訳、無いでしょ？ …… 前に、言っただけ。 結婚

するなら、倉真以外は考えられなかったんだから」

「その言葉が、嘘じゃなくて良かったよ」

「嘘だと、思っていた訳？」

「…… 思ってたなかった」

「じゃ、取り越し苦労って、ヤツ」

ニコリと利知未が笑う。 改めて引き寄せて抱しめた。

暫くそのまま止まっていた。 利知未が言い出す。

「五年前の、あの時には、考えても見なかったよ。 …… 倉真と、

こうしている所なんて」

「俺は、何時か必ずって、思っていたぜ？」

「…… あの頃から？」

ビックリした利知未の身体を、静かに離れた。 肩を抱いて、倉

真が言う。

「って言っても、当時は自分の心が解らなかった。 お前を好きな

気持ちに、気付く事が出来なかった。 …… この場所だよ、気付い

たのは」

「…… そうだったの？」

「ああ。 だから、今夜この場所で、ちゃんとプロポーズをしたい
と思ってた」

「良い、ムードだね」

「だろ？ あの頃、樹絵ちゃんが丁度、同じことで悩んで居たんだよ。 ジュンに対する気持ち、恋愛なのか何なのか解らないってさ」

「…そんな事、話してたんだ」

「そう、それで、戦友な訳だ」

「成る程。 けど、二人がタッグ組んでたとは、気付かなかったな。 それは、何時からなの？」

「あの夜だよ。 二人で、アイス買いに行ってただろ？ そこで、悩みを聞いた」

「あの時か。 ……道理で、帰りが遅かった訳だ」

膝に頬杖を付いて、利知未が呟く。

「ジェラシー、感じたか？」

「…何、言ってるんだよ？」

剥れた利知未の、言葉が変わる。 小さく笑って倉真が言う。

「冗談だ」

利知未は、頬杖を付いたまま、顔を倉真に向ける。

「……そんなに焼き餅、焼いて欲しいの？」

「愛情を実感できるからな」

「他の愛情表現じゃ、物足りない……？」

色っぽい目つきになって、手を倉真の頬へ伸ばす。

キスをして、腕をその首筋に絡める。 倉真はキスに、夢中になっ
てしまった。

「……そんな事、無いよ」

やがて、唇を離して、倉真が囁く。 利知未を改めて抱き寄せた。

「……ね、テント、戻ろ？」

「そうだな」

色っぽい雰囲気の流れで、腰を上げる。

利知未が立つのに手を貸して、腰を抱き合って、蛍の小道を後に

した。

Ｔシャツ一枚をパジャマ代わりにした利知未と、シェラフの中へ
潜り込んだ。そのまま、下着へ手を掛ける。

「…ノーブラ、だよな？」

「寝る時は、邪魔だから」

見つめ合い、囁き合う。　Ｔシャツの下から、倉真の手が進入し
ていく。

「…ん、声、出さないように、しなきゃ……」

薄いテントの外へ、音が漏れたら恥ずかしい。

「我慢、出来るか？」

「我慢、するよ…。…あ、ん、…倉真」

倉真の手は、既に利知未の身体を這い回っている。　首筋に唇を
感じて、利知未の切なげな息が漏れる。

確りと腕を、倉真の背中へ、回して行った。

更に進入して来た、倉真の指の動きに、利知未の息が、また漏れ
る。

「直ぐ、行けそうだな」

「倉真は…、…もう、元気みたいだね…」

「我慢、出来ないな」

「…良いよ……ん…」

利知未の返事より早く、倉真が、進入していく。
何時もよりも、静かに、ゆっくりと……。

その刺激に、あの人との行為が、重なってしまう。

『……駄目。　あの人じゃ、無い、今の私の、一番大切な、……倉
真』

想いを集中して、声が上がってしまった。

「…ん、あ、あ、…ダメ…！」

自分の声を塞ごうとして、倉真の唇と重なる。その動きに、倉真の動きが一瞬、止まる。

「…いや…止めないで……」

「利知未」

再び動き出す。必死に声押し殺す姿に、また気分が上がった。

『……早く、倉真の子供、欲しいな……』 切ない快感に、利知

未の心が、疼きだした。

その夜の行為は、何時も以上に、体力を使ってしまった

身体を離して寄り添い直し、囁く。

「何か、ちよつと、緊張しちゃう。…こついう所で、するのって」

「そうだな、俺も、初めての経験だよ」

「……本当に、始めて？」

「何を根拠に？」

「慣れてる見たいだったから」

「そう思っただんなら、俺の愛情の成せる業って事だ」

「しょってる」

「何とでも言ってくれ」

身体を起こして、Ｔシャツとパジャマ代わりのパンツを、履き直した。

「何時までも丸出しにしてたら、蚊に刺されちゃいそう」

「それもそうだ」

倉真も起き出して、服を着直した。

「そう言えば、山内さん、子供は二人ともキャンプの時の子だって、言ってたな。……館川さんも、今夜、恵まれるかもなって言われたよ」

「出来そうか？」

嬉しさ半分、期待半分、不安がスパイス、そんな気分で倉真が聞く。

「残念でした。今日も、ちゃんとピルを服用済みです」

「……なんだ、そうか」

「がっかりした？」

力が抜けて、倉真が寝転がる。その体の上に乗って、利知未が聞く。

「チョイな」

体の上に押し掛かって来た利知未の背中へ、手を回して引き寄せた。

「けど、ホツともしてるな。まだ、稼ぎに不安あり、だ」

「それ以前に、結婚前の子供になっちゃうよ？」

「ガキが出来たのが判ったら、その日の内に届けを出しに行く」

「……ありがと」

「当然だろ」

軽く、溜息を付いて続ける。

「……しかし、静かにスルのは、勢いでスル時より体力使うな」

「……あたしも。何か、珍しく疲れちゃった。やっぱり、声を殺すのって、辛いかも……？」

「じゃ、明日の夜は思い切り声が出せる所にも、行くか？」

「ホテルとか？」

「アパートでも、我慢してるだろ？」

「……まーね、だって。角部屋とは言え、やっぱり気を使うよ」
「下には、響いてたりしてな」

「そっちは、平気そうだよ？ 下の生活騒音、殆ど聞こえない」

「そうかもな。前、一人で住んでた部屋とは、偉い違いだよ」

「倉真の部屋は、結構、壁も薄かったよね。あの時も、堪えるの大変だった」

「明日は、やっぱ、寄ってかネーか？」

「……良いよ。じゃ、今夜は大人しく寝ましようか？」

「そっするか。お休み」

「お休み。」

キスを交わして、眠りに付いた。

今日は、やはり体力と精神を使い切った。設営や荷物運びの疲れも手伝って、その夜二人はぐっすりと眠った。

朝食は、山内夫妻が誘ってくれた。朝から焼きたてのパンを戴いた。

利知未は昨日からのお礼も兼ね、腕を振るって美味しい珈琲を淹れ、朝食の席で振舞った。二人とも、喜んでくれた。

奥さんは、写真を撮るのが好きな人だった。何枚か、同じフィルムへ収まり、現像したら送ってくれると約束をして、住所を交換した。

二人には新婚だと言っている。メモに書いた名前は館川姓で、利知未の名前も、倉真の隣に連名して記入する。

メモを見て、倉真は少し照れ臭くなってしまった。

一時間ほどで、テントを片付け終わった。後、もう一泊して行くと言う山内夫妻に挨拶を交わして、食材の残りを使ってくれる様に頼んで渡し、二人は車へ乗り込んだ。

十時前には溪谷を後にした。車の中で、将来の事を話し合った。その流れで、利知未は始めて、倉真の家庭の事情を聞かせて貰った。

「つまり、跡取り息子の反逆、だった訳だ」

「そうなるな。……って言うか、俺が和菓子職人なんか、向くと思つか？」

「…思わない。けど、職人気質は、お父さん譲りって事だね」

「喧嘩っ早さもな。お陰で小学校卒業の頃には、あの辺りのガキ

大将だったぜ？ 中学生とも、ダチ守るために喧嘩してた」

「倉真らしい。でも、お父さんは倉真に後、継いで欲しいと思ってるんだね。……いいの？ このままで」

「その内、親父に会いに行くよ。俺のやろうとしてる事も、話して来る」

そう言った倉真の真面目な顔に、利知未は心からエールを送った。そして、これからは自分も助けになるからと、改めて約束を交わした。

五

七月の日曜は、後一日残っている。キャンプから戻った、その二日後。懐かしい仲間から、連絡が入った。

「おう、久し振りだな、どうした？」

「どうしたって、訳でもないんだけどな。久し振りに、ツーリングにでも行かないか？」

電話の相手は宏治だ。

久し振りの親友からの連絡を、倉真は嬉しいと思う。

宏治はバツカスを手伝って働いている。普段、帰宅してからでは既に仕事中である。こちらから連絡をする機会も余りなかった。

時計を見ると、現在バツカスは営業中の筈だ。店から暇な時間に連絡をくれたらしい。

「いいぜ。どうせ次の日曜は利知未も仕事だ」

「そうか。上手く行ってるんだな」

「ああ。……婚約したよ」

照れ臭いながらも、宏治には報告するべきだろうと思う。利知未

の始めの弟分で、倉真の親友。利知末と倉真の微妙な関係の、見届け役みたいな奴だ。

「そうか、おめでとう！　じゃ、祝杯挙げるか？」

「サンキュ。で、何処まで行く？」

「箱根辺りが、適当じゃないか？」

「そうだな」

「偶には、あの辺りの温泉にでも浸かってくるか」

「お前にしちや、珍しく爺むさい事、言ってるな」

「悪かったな。偶には、のんびりしたいんだよ」

「ま、良いんじゃないか。利知末も温泉は好きみたいだからな、良く行つてたよ」

「そうなのか、意外だな」

「疲れが取れるから良いんだと言ってるな」

「成る程。ついでに一杯引つ掛けて、祝杯挙げてくるか」

「そうするか」

「…急に、悪かったな。じゃ、日曜に」

店の鈴が、鳴る音が電話口から聞こえる。

「昔通りの場所で、九時でいいか？」

「ああ、じゃーな」

「おお、日曜にな」

電話を切つて、脱衣所からの利知末の声に答える。

「電話、誰からだった？」

「宏治だよ」

「へー！　久し振りだね！　何だつて？」

「日曜にツーリングへ行かないか、って電話だ」

「そうなんだ。宏治、元気そうだった？」

「代わり映え無さそうだったけどな」

「そっか」

そこで話を切つて、ドライヤーを使い始めた。

利知未は、今日は休みだった。今月のシフトは色々だ。明日はまた通常出勤になっている。昨日、遅出で出掛けて一日休んで三勤務。一休日、そして、また三日夜勤で出勤。八月に入れば、夜勤明け休日から、また六月の勤務状態へ戻る予定だ。

変則的な休日設定で、今月は二回も倉真と連休が同じになってくれた。

お陰で、あの夜。倉真からエンゲージリングを貰える運びと成った。

『偶には、こう言う機会が有っても、良いよね』髪を乾かしながら、鼻歌交じりでそう思う。指輪は仕事中、ネックレスに通して身に着けている。パールのネックレスは、今は箱の中だ。

結婚指輪ならしたままでも仕事が可能だが、小さなダイヤ付きリングは、仕事中には邪魔になってしまう。箱に仕舞ってしまうのも、まだ勿体無い。

『もう少ししたら、持ち歩かない様にした方が、いいとは思っけど……』

もう暫く幸せの象徴を、身に着けていたい気分だった。

利知未が風呂から上がり、晩酌時間になる。倉真は、さっきまでテキストを開いていた。何時もの落ち着く姿勢でグラスを傾ける。

「宏治に、よろしくね」

「ああ、言っておくよ。……里真ちゃんとは、上手く行っただか？」

つい一昨日、思い出の溪谷へ、行って来たばかりだ。

あの時、お互いの想いを伝え合い、カップルになったのは、宏治と里真、和泉と由香子の二組だった。思い出して、何気なく倉真が呟いた。

「……別れたらしいよ。もう、半年くらい前の話らしいけど」
「そうだったのか？」

「うん。樹絵が、そんな事を言っていたって」

「樹絵ちゃん、ね。連絡も無かった筈だよな？」

「樹絵とは会ってないけど。五月にジユンが、病院へ来たから」

「あいつ等は、上手くやってるのか？」

「五月の時点では上手くやっていたみたい。新しい住所の葉書が来てたでしょ？ 引越し、樹絵の休みに手伝わせて、そのまま泊まって行っただって、ジユン情報」

「ジユンが、病院へ行っただのか？」

「健康診断にね。カメラマンの弟子になったって。一応、就職だから健康診断が必要に成ったんだと、言ってたけど」

「お前、今まで話にも上らなかったよな？」

倉真が、少し呆れたような顔になる。

「だって、その後から色々、あったでしょ？ 話す機会、無かったよ」

「……そりゃ、そーだったな」

誤魔化して酒を飲む。話を変えた。

「ジユンのヤツ、ちゃんと働いてるんだろうな」

「向いてるみたいよ？ 楽しいから、やってみようと思ったって言うてたし」

「ま、何事も無く真面目に働いてりゃ、問題ないか」

「倉真が、ジユンの事、心配するようになった……！」

場違いな驚きを、利知未が言葉に表した。

「どう言う言い草だ？」

「あはは。だって、ねえ……？」

「……言いたい事は、分かる気もする」

「ね？」

喧嘩にはならなかった。お互い、仲間との昔話は語り合う必要も無い。

話は上の空で、倉真は日曜、宏治の様子がどうなっているのか？
そちらが気になりだした。別れて半年も経つのなら、気持ちも
落ち着いた頃だろうとは考える。それでもアイツから言い出さな
い限り、突っ込むのは止めようと思った。

一時間ほど酒を飲み、寝室へ移動した。利知未を思う存分抱い
て、疲れに紛らせて眠った。余計な事を考えない為だった。

二十八日の夜から、利知未の夜勤が始まる。倉真と宏治がツ―
リングへ出掛けるのは、三十日の事だ。利知未は昼間、仮眠を取
ってから、また夜、出勤しなければならぬ。
倉真が出掛けるよりは少し早くに帰宅出来た。倉真は洗濯機を
回してくれていた。昨夜、利知未が頼んでおいた事だ。

利知未が眠い目を擦りながら、朝食の準備をしてくれる。

食事を終え、洗濯物を干すのは、倉真が出かけるまで時間がある
からと、手伝ってくれた。お陰で家事は早めに片付き、利知未は
ゆつくりと仮眠を取る事が出来た。

出掛けに送り出す。

「気を付けて行って来てね。夜は、八時までに帰って来れるなら、
一緒にご飯、食べよう？」

「ああ、そんな遅くはならないと思うけどな。土産、買って来る
か？」

「別にいいよ？ 何時も行ってた所だし。もし、買って来てくれ
る気があるなら、漬物と黒卵でも有れば、ご飯の足しには成りそう
だけど」

「見てくるよ。じゃーな、行って来る」

「うん、行ってらっしゃい」

仕事へ向かう朝のように、キスを交わして出掛けていった。すっ

かり、新婚夫婦のようだ。

自分の幸せ気分はさておき、今日は宏治の話を聞いてやろうかと思った。

約束の場所へ、ほぼ時間通りに到着した。宏治がバイクへ寄り掛かり、海を眺めてタバコを吸っていた。足元に、吸殻が何本か転がっている。

「悪い、待たせたか？」

「おれが早かったんだよ。 久し振りだな」

「二年振り位か？」

「二年も会わなかった感じは、しないな」

「俺もだ」

バイクを止めて、倉真もタバコを一本、振るい出した。

二人で出掛ける時の、昔からの習慣だった。宏治が先に吸い終わり、足元の吸殻を缶珈琲の空き缶へ拾い集める。

「利知未さんが見てたら、大目玉だ」

呟く様子に、昔からの真面目な宏治が思い出される。

「俺は携帯灰皿、持たされてるよ」

「彼女らしいな」

小さく笑って宏治が言う。 倉真も一本吸い終わり、携帯灰皿へ吸殻を捨てる。

「んじゃ、行くとするか。 コースは、普通りで構わネーよな？」

「任せるよ」

二台のバイクが、海の見える京浜公園を後にして、走り出した。

宏治は漸く里真と別れた思いから、立ち直り始めた頃だった。だからと言って新しく恋人を見つけようとは、考えられない。

朱美は約二ヶ月前、マンションを引き払って、実家へ戻って行った。

最後の夜に、言っていた。

「感謝、してるわよ。貴方との半年間で、あたしは気持ちの整理、着けられたみたい。彼女には、悪い事をしてしまったわね」

「元々、住む世界が違う恋人だったんだ。……おれも朱美さんのお陰で、漸く彼女を解放することが出来た。感謝、してるよ」

返した宏治の言葉に、朱美は切なげな微笑を見せて、最後に一言、残した。

「貴方、優し過ぎるわよ。……その優しさが、貴方をこれ以上苦しめないように、祈ってるわ」

それ切り会ってもいない。店にも勿論、来なかった。連絡さえ、する相手ではなかった。

ただ、この事を通して、宏治にまた男としての哀愁が備わった。今はバツカスに宏治目当てで来る客も、多くなっている。中々、モテている。それでも客に手を出す事は、朱美以来、二度としてはいい。

山道のカーブを遊んで、目的地へ到着した。入湯料を払って、冷房の効いた屋内へ入る。夏休みの日曜だ。客層はカップル、新婚、熟年夫婦、家族サービス中の大黒柱。そんな顔ぶれが殆どだ。男の二人連れは少し目立った存在だ。二人の身長差も、その珍しい姿を引き立ててしまう。

「目的地の選択、誤ったか？」

流石に、宏治が呟いた。

「良いんじゃないか。一応、俺たちと似た様な奴等も、チラホラとは居るぜ？」

「ま、こんなモンだな」

女子大生の友人グループも、居る事は居る。宏治に注目している。

「色男だな」

「何だよ？ それは」

「つーか、俺はどうやら、良い広告塔になってるらしい」

人よりも、頭が飛び出している。そこに注目して、一緒に居る男前な友人に視線が移動する。……そんな構図だ。

気にも留めない様子で、宏治は休憩所を覗いてみた。混んでいた。

「先に風呂、済ませるか？」

「その方が、良さそうだな」

方向転換して、大浴場へ向かった。

露天風呂へ浸かって、宏治が顔を湯でバシャツと洗う。

「偶には男同士、裸の付き合いってのも、いいだろう？」

「そりゃ、悪くは無いがな」

「昼間から露天風呂へ浸かって、風呂上りにビールで一杯、とか」

「テレビで野球中継でも眺めてた日にゃ、まさしく休日の親父だな」

「言えるな。……お前は、そう遠い未来でも、無いんじゃないか？」

「結婚は、二年は先になるよ」

「そうなのか？」

「ああ。利知末が研修医終わって、正勤医師になって、あいつ自身が納得するまではな」

「……別れたり、するなよ。……って、余計な世話か」

「利知末が、俺に愛想尽かさないように健闘するさ」

「尻に敷かれそうだな」

宏治に笑われて、倉真も薄く笑う。

どう考えても、亭主関白には成れないだろうと、自己分析をする。利知末は、倉真を立ててくれ様としているが、正直、あいつには勝てないと、倉真は思う。……泣き顔や、可愛い笑顔を見せられれば、結局、負けてしまう。それでも、その利知末の素顔を守り通そうと決めているのだから、当然なのかも知れない。

「付き合い始めて、二年位か？」

「そう言う計算に、なるな」

「一緒に住み始めてからは？」

「一年と四ヶ月くらいだな」

「そーか、長いな」

「でも、無いだろ？ 世間じゃ七、八年付き合つて、漸く結婚つてカップルだつて居る位だ」

「それは極論つてヤツだろ？ それ言つたら、三ヶ月も経たずに結婚するヤツだつて居るんだ」

「そりゃ、そうだな」

暫く、会話が止まる。 宏治が、湯船をぼうつと眺めて、言い出した。

「里真と、別れたんだ。 …もう、半年になる」

「…そーか。 …ま、色々あるさ」

「…ああ」

呟いて、自嘲的に笑う。

「いい加減、お前に報告する事でも無かつたよな。 ガキの恋愛じゃあるまいし」

「いいんじゃないか？ 敢えて黙っている必要も無い」

「そうだな…。 そろそろ、出るか。 ビールが恋しいよ」

昔のような、少しはにかんだ笑顔を見せ、宏治が立ち上がる。

その身体つきは、また男らしく逞しくなっていた。 背も少しは伸びて来たようだった。 小さく息を付いて、倉真も立ち上がった。

休憩所は、まだまだ混んでいた。 つい、ぼやいてしまう。

「混んでるな」

「昼時だ、仕方ネ よ」

人より頭が出ている倉真が、視線の先に、屋外のテラス席を見つける。

「外、行かないとタバコも吸えなそうだな」

「ん？ ああ、禁煙だな」

「出るか？」

視線を斜め下に、宏治の表情を見る。

「そうだな。折角、祝杯挙げようとしてるんだ。タバコが無いと寂しいだろう？」

宏治は、それ程のヘビースモーカーでは無かった。倉真が、一日一箱以上は確実に消費していたのは解っている。

ビールと定食と、摘みに枝豆を食券で購入して、二人はテラス席へ出た。

中学・高校時代、倉真は良く、家出して宏治の部屋へ転がり込んでいた。その度に、夜中まで付き合わせて飲んでいて。

久し振りに向かい合いグラスを傾けて、あの頃に戻ったような錯覚に陥った。

「それにしても、お前らも随分、時間が掛かったよな。付き合い始めるまで」

乾杯して、ビールを飲んで、宏治が言い出した。

「そうだな。三年、待ったよ」

「成る程な」

「何だよ？」

「三年待つて、やっと思いが通じたんなら、その後、四年待つてが五年待つてが、大して苦じやないって事か？ と、思ったんだよ」

倉真はグラスを置いて、タバコへ手を伸ばした。火を着けながら、答える。

「：そうでもないぜ。アイツ、モテるみたいだからな。結構、シンドイよ」

「そうなのか？ おれは、もう二年近く会ってないからな。そんなに女が上がったのか？」

中学時代から、大学四年時代まで、身近な存在だった利知未を思う。

昔はそれこそ男みたいだった。最後、バツカスを手伝ってくれた十カ月間は、それでも少しは、女らしくなっていたかも知れない。

「そりゃー、もう。今のアイツは、フリーのお前には合わせたくない位だ」

ニヤリと笑って、軽く惚気てやった。

「どう言う意味だよ？」

「親友に女、取られたくないって事だ。…男っぷりが上がったお前の前には、マジ連れて来たくないかもな」

「そんなに変わったのか？一度、見てみたくなかったな。今度、三人で飲まないか」

「止めとけよ、俺達に当てられるぞ？お前も彼女同伴なら、考えてやる」

「相変わらず口の悪い事だな。その言葉、痛いぞ？」

「羨ましいか？」

「あー、羨ましいよ」

宏治もタバコへ手を伸ばす。鼻で笑って火を着ける。

「そうだな…。今度、店の招待状を利知未さん宛に送るか？倉真抜きでこ来店下さいって、一言書いて」

「あ、テメー！そりゃ、どー言う了見だ？いい女に成ってたら、口説こうとか思ってたネーだろーな？」

「それも、いいな」

今度は宏治がニヤリと返す。

「止せよ、だったら二人で店に行く」

笑いながら話していた。真面目な顔に戻った宏治が言った。

「そうだ。顔、出せよ？お前ら最近、全然来なくなったからな。お袋が会いたがってるよ」

美由紀には、あの仲間全員が大層、世話になっている。

「美由紀さんか。随分、世話になりっぱなしだったな」

「お袋にとつては、お前らも子供みたいなモノらしいからな。寂しがつてるんだよ、最近」

「そーだな。顔、出しに行くか。利知末にも言つとくよ」

「そうしてくれ。和泉やジュンも偶には来てるぞ。一番、世話焼かせた次男坊と長女が顔を出さないのは、どう言う事だ？ って、兄貴も言つてたよ」

「宏一さんか。元気なのか？」

「元気だよ。今、見合い攻撃に辟易してる」
笑いながら、宏治が言う。

「家の家族構成は、五男一女だつて笑つてるけどな。誕生日の關係で、おれは次男から四男に格下げだよ」

「そうなるのか。和尚が三男、ジュンが末っ子つて事だな」

「賑やかなもんだ」

「…そうだな」

近々、バツカスへ二人で行くと、約束をした。

それ程、飲んでいた訳ではなかったが、帰りの運転がある。適当に切り上げ、もう一度、湯船に浸かり、酔いを冷ましてから帰宅した。

倉真は利知末に言われた通り、漬物を買つて帰る事にした。

「土産か？」

「飯の足しになるもん、頼まれた」

「流石、利知末さん。確りしてんな」

宏治は土産を買う倉真を見て、笑っていた。

六

倉真が帰宅したのは、七時過ぎだった。利知末と向かい合い、

土産の漬物を食卓へ乗せて、夕食を取ることが出来た。

「バツカスか。行つてなかったね、確かに申し訳なかったな」

「出掛けに発破掛けられて来たつて、言つてたぜ。俺と会うなら約束して来いつて」

「成る程。じゃ、次の休みは…あ、丁度いい日がある」

バツクからシフト表を出して、利知未が言う。

「倉真、五日の土曜日、休みだよな？ あたしも、休みになつてよ。日曜はバツカスが休みだから、この日が良いと思うけど？」

「明日、給料出るからな。何とかなるか」

「…ごめんね、今月、お金掛かつたでしょう？」

「指輪の事、言つてるのか？ 気にするな、少しは貯金があつたよ」

「これからは、将来貯金を始めない？」

「将来貯金？」

「結婚式。それから将来、倉真の城を持つ為の貯金。…その内、子供が出来たら、またお金が掛かるだろうし」

「…確かにな」

「生活費、十万円ずつ出してでしょ？ 上手く遣り繰りすれば、月末に一万から二万、残せるんだよね。成るべく、お弁当を作るようにして、小遣いを少し減らして、生活費の残りと足して月々、責めて三万〜四万円。二人で出し合つて、貯金する。三万でも一年で三十六万。ボーナス出たら、もう少し足して、年間責めて五十万は貯めて行くでしょ？ 二年後には、百万。けど、そこで結婚式に掛かる可能性があるから、また、始めないとね。…本当は、式とかはしなくてもいいけど」

倉真の実家が、どう言う反応をするのか、判らない。

「式、しないで構わないのか？」

「あたしは、平気だよ？ ウエディングドレスとか、特に着て見たとは思わないから」

「…俺は、見てみたいな」

「写真だけ、撮る…？」

「それでも、イイけどな」

「取り合えず、今は、もう少し先の話だけどね」

少し照れ臭い。倉真とこんな話をするなんて、昔の自分には考えられなかった事でもある。

照れた顔をする利知未を、倉真は笑顔で見つめてしまった。：

…ニヤケ顔かもしれない。

「それから先は、その時の収入に合わせて徐々に金額、増やして行つて。お互いの貯金は、お互いの管理と責任で、し続ける……。

何て、考えてみた」

食事をしながらの会話だった。そろそろ、八時になろうとしている。

「また、ゆっくり話し合おうね？」

「そうだな」

倉真も利知未も、其々で貯金はして来ている。

その金も勿論、将来貯金と一緒にして、何時か、倉真の夢を叶える足しにしようと考えていた。

利知未の貯金は、現在、六十万。研修医として働き始めて、まだ四カ月だ。それまでに貯めた分と合わせても、そんな物だ。

倉真は、二人で住み始めてから、それでも頑張っていた。

それ以前の貯金と合わせて、七十万弱はあったが、三十万円は婚約指輪代に消えている。現在、利知未よりも稼ぎは少ない。

給料三か月分のリングなど、無理な話だった。

八時半前に、利知未が仕事へ向かった。明日の朝、帰宅すれば、夜勤明け休みになり、八月に突入だ。

八月一日が休みで、翌日からまた遅出が三日。話は明日の夜に、のんびりと晩酌でもしながらにしようと言って、アパートを出た。

利知末が出てから、倉真はテキストを開いた。

『資格、取れば給料も上がるしな。……何より、自分の城を持つためだ』

改めて気分を引き締め直して、今夜も裕一のお古に願掛けをする。

『居睡り、しないように』　そんな願掛けだったりする。

勉強は、やっぱり自分で頑張るより仕方がないと思った。

翌朝、利知末の帰宅は、倉真が出る時間には間に合わなかった。

これから先、夜勤明けは、そうなって行きそうだ。

今までは研修医として、少しだけ楽をさせて貰っていた。本来、夜勤で出勤した場合、八時から出勤してくる通常勤務の医師と、遅出の日と同様、預かり患者の症状報告もして行くのが、普通だ。

五月から利知末は、水曜の午後、外来を担当するようになっていた。自分の担当患者が、流石に増え始めてしまった。

勤務時間のずれを調整する為、預かって貰う患者も増えたと言う事だ。その関係である。

それでも、倉真との関係が落ち着いた、この時期まで。楽をさせて貰って来れたのは、ラッキーだったと言えるかも知れない。

帰宅して、倉真が朝食に、味噌汁だけは用意してくれた事を知る。飯は勿論、まだ残っている。感謝して、戴く事にした。

昨日の土産の漬物も、まだ残っている。いつも夜勤明けの朝は、軽く腹を満たすだけだ。それだけで、十分だった。

朝食を済ませて、シャワーを浴びる為に脱衣所へ入ってみると、

洗濯機が唸っていた。脱水中だ。つい、声が漏れた。

「洗濯、回して置いてくれたんだ。…助かるな」

そこにも、倉真の優しさを感じて、嬉しく思う。

倉真は流石に、一人暮らしが長かっただけの事はある。ピンポイントで、上手い具合に家事の協力をしてくれている。

『結婚しても、この調子で居てくれるのかな……？』ふと、そう思う。

自分が専業主婦に成れるのなら、問題は無いが。将来、倉真の整備工場を立ち上げると言う、夢がある。金は、幾らあっても足りない位だ。

出来るだけ、医者として働き続ける必要があるだろう。つまり、共働きだ。そうなった時に、倉真が今のまま家事の協力を厭わないでくれるのなら、生活もし易いだろう。

洗濯物を干し、簡単に掃除を済ませて、利知未は仮眠を取った。午後二時半過ぎに起き出して、買い物へ出掛けた。今夜は倉真の好物を、作って上げようと思った。家事の協力への、ささやかな感謝を込めて。

夕飯には、丼物が好きだと言っていた倉真の為に、中華丼を作ってみた。美味そうに平らげた倉真から、次のリクエストが入る。

「今度は、カツとじが食いたい」

「カツ丼より、カツとじ、が、いいの？」

「好きだぜ？ 裕一さんも豚肉料理、好きだったって言っていたよな」

「そうだね。 裕兄は豚肉料理、全般が好きだったから。 優兄と

一緒にあって、喜んで食べてたのは、カツ丼だったな」

「じゃ、頼む」

「OK。 明日、作っておくね」

「お前は、休みだったな」

「そう。 今夜は、ゆっくり晩酌が出来そう」

「んじゃ、早めに勉強、終わらせるか」

「短期集中の方が、倉真向きかも知れないね。どうせ、長くなる
と眠っちゃうんだから」

「ソコを突っ込むか？ 最近は居睡りしなくなって来たぞ」

「みただけど。 あたしも、今夜はチョット、勉強しないとなら
ないから」

食事が終わり、利知未は食器を片付けていた。 洗い終わり布巾
で拭き始めると、倉真が立ち上がって棚へ片付けてくれる。

こう言った何気ない手伝いをして貰うと、倉真の点数が、利知未
の中でまた上がる。

「ありがと」

「おお」

片付け終わり、倉真は風呂へ向かった。

「着替え、出しとくね」

「頼む」

何時も通り利知未が、倉真の着替えを整える。 今日、裕一のお古だ。

近頃すっかり、勉強を頑張る倉真のユニホームと化している。
本人が言うには、気が張り易い様な感じがするらしい。

倉真が風呂から上がり、二人で勉強を始める。 二時間と区切つて、十一時には終わって、晩酌にしようと決めた。

利知未は、山内婦人から教わった酒の肴を二品、用意していた。
夜勤明け休みか、休日でないと中々、摘みを用意する機会も無かった。

時間を見て、冷蔵庫から摘みを出して、ついにて冷酒を持つてくる。

「この前、山内さんから教えて貰った、肴。 作って見たんだ。
日本酒の方が合うから、ちょっとどう？」

「偶には良いな。何だ？」

「山芋と海苔の梅肉和えと、浅蜆の又タ。倉真、好きかな？」
「美味そうだな」

倉真は早速、浅蜆の又タに箸を伸ばした。

「…どう？」

「美味い。酒、注いでくれよ」

ホツとして、利知未は倉真の杯に、冷酒を注いだ。

「夏に冷酒も、中々、良いな」

クイツと杯を煽って、倉真が軽く舌なめずりをする。ソファに落ち着いた利知未の杯にも、勺をしてくれた。

一口飲んで、倉真の身体に、背中を預ける。

「やっと、落ち着く姿勢になれた」

ニコリとする利知未に笑顔を返して、再び杯を煽る。

「ピツチ、早過ぎない？」

「肴が美味いと、酒も進むんだ」

山芋にも、箸を付けた。

「こっちも、美味いな」

「どっちが好き？」

「そうだな…、又タ、だな」

「ちよつと、爺臭いな」

「シヨーがネーだろ？ 美味いモノは、美味いんだ」
もう一度又タに箸を付け、酒を煽る。

「倉真は、そっちの方が好きだろうと思ったけど。味、濃い方が好きでしょ？ けど、あたしは山芋が良いな」

「どっちも美味いよ」

倉真が箸を付けた山芋を、利知未が横からパクリと奪った。

「うん、美味い」

「お前なー」

「何？」

ちよつとした悪戯だ。ニコリとして、倉真を見る。

「このヤロ。食いモンの恨み、晴らしてやる」

そのまま、利知未の頭を抱え込んで、軽くウリウリとしてやった。
「イタイ、イタイ、止めるよ?!」

じゃれ合いになると、言葉も戻ってしまう。ジタバタして逃げようとして見た。倉真の力が緩んだ隙に、脱出した。

「反撃!」

同じ様に倉真の頭を抱え込んで、ウリウリしてみる。倉真はビクともしない。それどころか、喜ばれてしまった。

「柔らかくて、気持ち良いな」

慌てて倉真を開放した。胸を両手で隠して舌を出す。

「スケベ」

「スケベと来るか。構わないけどな。正常な反応だと思うぞ?」
「いいよ。だったら正常な男には、もうやらない事にするから。」

…お酒で、理性が飛ばなければね?」

少し意味を含んだ目を、チラリと倉真へ向けてやった。

「飛ぶ程、外で飲まないでくれよ?」

「じゃあ、倉真が止めてよ?」

「意地でも止める」

「じゃ、五日の夜も安心だ」

そう言って利知未は、勝ち誇った笑顔を見せた。

「けど、本当に久し振りだな。宏治や美由紀さんと会うのも。」

…昔に、戻るかも知れないな」

「その方が、俺は安心だ」

「どうして?」

「宏治に、婚約者を寝取られないで済む」

利知未は倉真の言葉に目を丸くする。直ぐに、吹き出してしまった。

「バカ言ってる! そんなに、あたしの事、信用出来ない?」

利知未は、やや色っぽい目をしている。酒の所為もあるのだが、少し倉真をからかってやろうか、とも思う。

「お前よりも、宏治だな。随分、遅しくなつてたぜ？」

「そつか。じゃ、力任せに襲われるかも知れないって事だ。

：

有り得ないな。だって、投げ飛ばしちゃうだろうから」

「情に絆されて、力が抜けたりしないのか？」

「：そうしたら、どうするの？」

利知未に色っぽい目で見つめられて、少し考えて答えた。

「：宏治と、殴り合うな」

「で、あたしが二人を止める訳だ。歌でも歌う？ 昔流行った

喧嘩を止めて、とか？」

少しだけ、歌詞にメロディを着けて、歌ってみた。そして、また吹き出してしまう。

「そんな事には、絶対にならないから。安心して」

真面目な目になって、利知未が倉真を見つめた。

「あたしには、例え、どんなに善い男が、目の前に現れたとしたって、倉真以上の相手には、ならないよ？」

「そう、願ってるよ」

「もっと、自信持つて：！ この間も、そう、言っただしょ？」

小首を傾げて倉真を見た。倉真は、利知未を引き寄せた。

「言われた、ばっかりだったな。……信じてるに、決まってるんだろーが」

「うん。：ね、片付けて、ベッド、行く？」

「：そうだな。愛情を確かめたくなつた」

そつと倉真から身を離して、利知未が言った。

「じゃ、残りは冷蔵庫に入れておくね。明日の朝、出すよ」

「そつしてくれ」

倉真も立ち上がり、一緒に片付けてくれた。

十二時前には、寝室へ引っ込んだ。

思つ存分、抱き合つて、二人は朝まで熟睡する事が出来た。

3 研修医一年・八月

3 《研修医一年・八月》

—

八月五日、土曜日に、二人はバツカスへ向かった。

何時もより、早めに夕食を済ませて、夜七時頃には、アパートを出る。

「ここから、電車使って四十分くらい？」

「だな。バイクで行くのは、止めとくか」

「そうだね。あそこ行ったら、深酒になるのは目に見えてるものな」

利知未の左手の薬指には、倉真から貰ったエンゲージリングが光っている。今日は、パールのネックレスもして来た。最近の癖で、口紅くらいは塗っている。腕時計は美由紀から貰った、女持ちの物だ。

あの頃から約二年が経ち、随分、利知未の女っぷりが上がっている。倉真は確りと、その腰に手を回しながら、宏治がどんな反応をするのか、楽しみだと思っていた。

「久し振りに行くんだから、看板まで、ゆっくりしたい所だけだな」

「終電、なくなっちゃうでしょ？」

「二人で泊まるのは、流石に気も引けるか」

「昔の状態ならイザ知らず、今の状態では、ちょっと恥ずかしい感じだな」

利知未が、照れ臭い顔をして言った。

「それも解る」

「倉真は、泊まって行きたい？ 多分、美由紀さんも喜んでくれるんだろうけど……」

「こーゆー事が、し難いだろ？ あの家じゃ」

利知未を軽く引き寄せ、耳元で囁いて見た。 軽く、耳の横へキスをする。

「…恥ずかしいな」

「平気だ。俺の顔が見える高さに目のあるヤツは、この車両には居ないみたいだからな」

チラリと周りを視線だけで見回して、倉真が言う。

「…そーだけど」

少し、赤くなってしまった利知未を見て、倉真は小さく笑った。

利知未の気遣いに、倉真なりの思い遣りで返事をした。 それは、解った。

恥ずかしいと思う反面、嬉しいとも思う。 十五分後、電車を降り、駅から徒歩十分の距離にある、バッカスへと歩き出す。

バッカスの、懐かしい鈴の音を響かせて、二人で店内へ踏み込んだ。

「いらっしゃいませ！」

営業スマイルで振り向いた美由紀が、一瞬、目を丸くする。

「晩は」

倉真が、コンバンワ、の短縮形で挨拶をした。

「利知未！ 倉真！ 二人とも、久し振りねえ！」
思い切り嬉しそうな笑顔で、迎えてくれた。

「宏治も、役に立ったのね」

くすりと笑って呟いて、二人を手招いた。

「早く、いらっしゃい。ボックス席で、のんびりして頂戴」
美由紀に言われて、二人はチラリと顔を見合わせる。

「こつちで、良いですか？」

利知末が答えて、カウンター席へ向かって歩き出した。

「カウンターじゃ、ゆっくり出来ないでしょう？」

「いいえ。昔から、ここが私達の指定席でしたから」

大人っぽく成長した利知末の女らしい笑顔に、美由紀も目を細める。

「…そうね。良く、その隅の席で飲んでいたわよね。懐かしいわ」

まだ二年しか経っていないのに、可笑しいわね、と言って、美由紀が笑った。

カウンター席、昔から何時も座っていた角の席へ腰掛けて、倉真が言う。

「宏治は？」

「今、ちよつと買い出し中なのよ。牛乳、切れちゃって」

「そうですか。…じゃ、のんびり飲んで、待ってようか？」

「そうだな」

利知末の言葉に頷いて、倉真が答えた。美由紀が一端ボックス席を立ち、カウンターへ入ってくれた。

「まだ、キープボトル残ってるわよ？ 三男と末っ子が、定期的に来て入れ替えて行ってるわ」

笑いながら言つて、『FOX』のタグがついたボトルを用意してくれた。

「綺麗になったわね。倉真も随分、遅くなった様だけど、利知

末の変わり様に比べたら大した事無いわね」

「相変わらず、スッパリ切ってくれるっすね」

そう言つた倉真の顔を見て、コロコロと笑う。

「息子は甘やかさないのよ。娘は可愛がつてあげるけど」

「そう来ますか」

「当たり前でしょうが。男は社会の荒波に揉まれても平気な精神力を身に付けさせてあげるのが、母親の勤めよ」

「そつか、覚えておこう」

「何？ 子供、出来たの？」

「そう言う意味じゃなくて。 …… 将来の為に」

「利知未も、将来の子育てを考えるようになったのね。 はい、口ツクで良かったわね？」

「流石、俺たちの癖、良く覚えてるな」

「何年、目の前で飲んで来たの？ あんた達、未成年の癖に何時も口ツクで、ガンガン飲んでいたでしょう。 忘れる訳、無いわ」

「お世話になりました」

「これからも、お世話させて頂戴。 余りにもご無沙汰で、少し心配になっていた所だったのよ」

「済みません」

素直に二人で頭を下げた。 息の合った様子に、美由紀が笑う。

「呼吸がピッタリね」

笑われて、二人も照れ臭くなって、はにかんだ笑みを見せる。

「美由紀ちゃん、誰だい？」

酔っ払った常連・商店街店主席から、声が掛かった。

「やだ、忘れちゃったの？」

利知未と倉真よ、と言い掛ける美由紀に、倉真は人差し指を立て、内緒の意思を示す。 利知未が面白そうに笑っている。

倉真は、椅子ごと振り向いた。

「久し振りっす。 まだ、手作りコロツケ、やってますか？」

「家の看板商品だよ」

先を言い掛けて肉屋店主・大熊氏は、目を見開いた。

倉真を酔っ払った目で確りと凝視する。

「もしかして、一番どうしようもなかった息子か？ 美由紀ちゃんに世話やかし切ってた」

「そりゃ、キツイな。 確かに俺が一番、世話焼かしてたっすけど」「もつと世話を焼いて貰った、娘も居ますよ？」

利知未も椅子ごと振り向いた。

「こいつは驚いた！ すっかり、落ち着いた様子だな」

「誰だつて？」

「あいつ等だよ、最近、顔出さなかった、残りの二人！」

「倉真と…、もしかして利知末か？ ……随分、綺麗になったもんだ」

蕎麦屋の大野は、相変わらず常連組みの中でも紳士的だった。

「そう言われると、照れ臭いな」

「本当に利知末か？」

八百屋の佐々木は、やっと口をきく。

「久しぶりでしょう？ 昔、この子達のこと良く面倒を見て貰ってました」

美由紀が言う。 魚屋・田島は何時も通り、人一倍飲んでいた。

「何だ、何だ？ 誰だつて？ おお！ 不良少女少女か？ テメー、良くも良くも今まで顔、出さなかつたじゃないか？！ ああ？ アンだけ美由紀ちゃんに世話になっておいて、冷た過ぎだぞ！ そーは、思わネーか？」

「また随分、酔ってるな。 久しぶりで説教、されちまった」

参った顔で倉真がぼやく。 それを見て利知末が笑って、田島に答えた。

「本当に、申し訳ありません。 やっと大学を卒業して、日々、忙しくしていたら、あつという間に二年も経っちゃいました」

絡み酒には、何を言っても始まらない。 昔から田島のコレが始まると、利知末は素直に聞いていた。

「何時もの事だよ。 奥さんに迎えに来られる前に、たらふく飲むんだよね、田島さんは」

利知末に言われて、倉真は軽く首を竦める。

「違うない」

「利知末は相変わらず、賢いな」

蕎麦屋の大野は、そう言って笑った。

カウンター席から、商店街店主組みの席へ言葉を投げながら、賑やかに飲んでいた。裏口の扉が開き、宏治が買い物袋を片手に戻って来た。

「ご苦労様！ 宏治、早くカウンター入って」

美由紀が声を掛けた。宏治には、まだ二人の姿は目に入っていない。

「了解。…人使い荒いな、お袋は」
ぼやきながら、店内への扉を開いた。

店へ入り、先ずは倉真の後姿を見つける。五日前に会ったばかりだ、直ぐに気付いた。

「ただいま。倉真、来てたのか！」

宏治の声に、倉真が軽く振り返る。利知未はまだ店主組みの方へ身体を向けて、ニコニコと、田島の説教に相槌を打っている。

「来たぜ。利知未も一緒だよ」

倉真の声に、利知未が振り返り向いた。

「久しぶり。…元気だったか？」

一瞬の間で、気分が少し昔に戻る。宏治は、二年前より更に男つぷりが上がっていた。

「……………」

振り返り向いた利知未を見て、宏治はビックリした顔で、止まってしまった。

二年前より綺麗になっている。口紅を塗り、髪も整えて眉も綺麗に整え、細い首筋に倉真から貰ったパールのネックレスが、上品な光を放つ。

「なーにやってんの、この子は。利知未よ、判ってる？」

美由紀が、息子の目の前で手をヒラヒラと振る。

「随分、変わったからな、無理も無い。俺達だって、信じられないよ」

大野は軽く笑みを見せる。

「本当にね。じゃ、宏治、カウンターお願いね」

美由紀は、まだ呆けた顔をしている宏治を見て小さく笑う。 カウンターを出て、ボックス席へと移動して行った。

「……本当に、利知末さんっすか？」

宏治の様子に、利知末もくすりと笑みを漏らす。

「そーだよ。 そんなに変わったか？」

「倉真、おれには別人に見えるんだが、本物だよな？」

「当たり前だろ。 手、出すなよ？」

倉真が、恐れ入ったかと言わんばかりの笑みを見せた。

「……へー。 随分、女っぽくなったな。 マジ、驚いた」

「ありがとう。 褒め言葉として、受け取っておくよ」

利知末はグラスを宏治へ傾け、乾杯の意思表示をした。

「言葉は相変わらずですね。 やつと理解できました」

倉真の前、美由紀の前、利知末の前、客の前、其々で、宏治の言葉は昔からクルクルと変る。 昔、利知末の前に居た時の調子を、やつと取り戻した。

「昔から言っていたでしょう。 利知末はちゃんとしたら、間違えるくらいの美人になるよって。 だから早くに掴まえてしまつべきだったのよ」

美由紀がボックス席から声を投げる。

「捕まえるって、嫁に來いってこと？」

「そうよ。 もっと宏一と宏治に、発破掛けとけば良かったわ」

「あはは、ありがとうございます。 けど、宏一と宏治じゃ、兄貴と弟にしか見れなかっただろうな。 ……付き合い、長過ぎて」

「大して、変わらないでしょうに」

倉真の事を指した美由紀の言葉に、チラリと二人、視線を合わせる。

美由紀は、大熊が渡してくれた水割りに口を付けていた。

「好いやツでも、出来たんじゃないのか？」

佐々木の言葉に、宏治が答える。

「好いやツも何も、こいつ等、婚約したんですよ」

「こいつ等あ？　だったら、相手を連れて来いってんだ！」

田島は酔っ払って怒鳴る。　吹き出して、宏治がもう一度、説明をする。

「だから、二人が婚約したんです。　倉真と、利知末さんがフィアンセです」

美由紀も流石に驚いていた。

「水臭いわね。　何でもつと早くに言わないの？！」

付き合ってる事は当然、知っている。　同棲中な事も勿論、判っている。　婚約までしたと言うのは、初耳だった。　宏治も言っていない。　なかった。

「婚約指輪、してるじゃないか？　お袋、気付かなかったのか」

利知末の左手を見て、宏治が言う。

「そんなチツチャなダイヤのリングが、婚約指輪だ何て思わないでしょう」

「…キツ」

「倉真、平気？」

痛い顔をする倉真に、利知末が囁いた。　美由紀は二人を見て笑っている。

「倉真、給料いくら貰っているの？　私の可愛い娘に手を出したんだから、キツチリ、三か月分のお給料、払ったんでしょねえ？」

笑いながら、倉真をからかってやった。

「いいんです。　金額の問題じゃ、無いんですから」

利知末はハッキリと言い切った。

美由紀の冗談は判っている。　始めの言葉通り、美由紀は息子達に対しては、昔から容赦がない物言いをして来た。

「あらあら、当てられちゃったわ」

美由紀が言つて、くすりと笑つて言い足した。

「おめでとう。　じゃ、今夜はお祝いに、私の奢りにさせて頂戴。　熊さん達も三千円均一で良いわよ。　ささやかだけど、パーティ

「にしましょう！」

「いいのかい？ 美由紀ちゃん。俺達も、もう結構、飲んでるよ」
「いいのよ。皆、揃って、あの子達の事、良く気に掛けてくれて来たでしょう。身内のパーティー。宏治。看板、片付けてしまっ

「了解」

美由紀に言われて、宏治が看板を片付けに外へ出た。

「本当に、良いんですか？」

「当たり前でしょう？ 何を遠慮してるの。あなた達は私の子供も同然なんだから。親の厚意は、素直に受けなさい」

「ありがとうございます」

美由紀の言葉に、利知未が頭を下げて礼を言う。倉真も頭を下げる。

「看板、片付けたよ。貸し切り札、出しておいだ。」

外から戻った宏治の言葉を受け、美由紀が頷いて言う。

「良いわよ。さてと、じゃあ久し振りに、お店で料理の腕を振るわせて貰おうかしら」

「あたしも手伝います」

「そうね。元、従業員だし、娘だし。遠慮はしないわよ」

「そうして下さい」

美由紀に返して、倉真に軽く頷いて、利知未はカウンターへ入った。

「じゃ、何でも良いから、材料見て作ってみて」

利知未は頷いて、冷蔵庫を検分した。

「倉真、この前のあれ作れそうだよ？」

「どっちだ？」

「倉真の好きな方」

「そりゃ、良いな。宏治、日本酒もあるよな？」

「勿論。この店に無いモノは無いよ」

親友二人はニヤリとし交わした。

「じゃ、冷酒にして出してくれ」

「OK、何が出てくるのか楽しみだな」

宏治は言いながら、日本酒を用意した。

美由紀と話しながら調理を開始する利知未を見て、大熊が倉真を呼ぶ。

「こっちで飲んでようじゃないか」

「っすね」

席を立つ倉真に、宏治が、栓の開いた高級ブランデーのボトルを渡す。

「半年以上前の、キープボトルだよ。金は貰ってある」

「良いな、サンキュ」

期限切れボトルの残りは昔から、宏治と倉真や仲間達の腹へ収まっていた。美由紀もその事は大目に見ていた。

酒の注文は宏治が引き受けて、美由紀と利知未は、一時間以内で乾き物やフルーツを含めた、十皿を仕上げてしまった。

十皿の中には、浅利のヌタも並んでいた。

宏治も混ざり、ボックスのテーブルを繋げた席へ移動した。全員で乾杯をして、パーティーが始まる。全

「何時、婚約したんだ？」

大野に聞かれて、倉真が答える。

「婚約って言っても、略式で。まだ一週間っす」

「じゃ、正式にする時に、もっと高い指輪、買う訳か？」

さっきの美由紀の冗談を持ち出して、宏治が突っ込んだ。

「お前な、当てられてる仕返しか？」

「良く判ってるじゃないか？」

「ったく」

二人の会話を聞いて、利知未が美由紀と顔を見合わせて、くすくすと笑う。

「だったら宏治。その前に、もつと立派な婚約指輪を用意して、利知未にアタックなさい。お金は出してあげるわよ?」

美由紀が笑いながら、更に冗談を続ける。

「って、お袋も言ってるし、マジ、アタックしようか?」

「テメ、ふざける」

宏治の頭を抱え込んで、ウリウリと反撃してみた。親友同士のじやれ合いを見て、また笑い声が響く。

「にしちゃあ、本当に、おじさんも口説きたくなるようなイイ女に成ったなあ、利知未は。……何、したんだ?」

佐々木が倉真に突っ込んだ。倉真は宏治を開放して、話をする。「何って?」

「家のカミさんでも綺麗になる秘訣ってモンを、教えろって事だ」

「そう言われてもな」

「ちゃんとセックス、してる?」

美由紀が隣から突っ込んだ。

「また、ストレートだな、お袋」

倉真から開放され自由になった宏治が、我が母の言葉に目を丸くする。

「女が綺麗になる秘訣は、愛情と満足するセックスしか無いのよ」

「極論だな。美由紀さん、彼氏居るんだ?」

利知未は照れ隠しに突っ込み返した。

「当たり前でしょう。こない女、ほつとかれると思うの?」

利知未

「ごもつとも」

首を竦めて笑って、利知未が肯定する。

「誰だ? 我らのアイドルを独り占めするフテー野郎は?!」

「内緒よ。肉切り包丁、振りかざして乗り込まれたら大変だもの!」

「そりゃ、そーだ」

倉真も頷いて、また、笑い声上がる。

笑いの中で、宏治が倉真に聞いた。

「けど、マジ、おれが利知未さん口説いたら、どうする？」

「いくらお前でも、タダじゃおかネー」

倉真は指の関節を鳴らして、軽く宏治を睨んでやった。

「はいはい。血生臭いのは、ごめんよ。利知未も困ってるでしょう」

「言い出しは、お袋だぞ？」

「それもそうだったわね」

「平気ですよ。襲われそうになったら、投げ飛ばします」

「そうね、利知未は家のより強かったものね」

「力は、もう適わないとは思っけど。合気道、習ってたから」

「そうだったのか。俺達は知らなかったな」

「色男が、良く利知未に腕、擦じ上げられていたでしょう？」

「色男って？ ああ、あの、哲とか言うキザなアンちゃんか！」

「哲、か。懐かしい名前。……まだ来てるんですか？」

「偶には顔を出してくれていたわね。このブランデー、佐久間さんの期限切れよ」

「そう言えば、そうですね。じゃ、半年は顔、出さなかったんだ」

「奥さんと海外旅行へ行くって言ってたな。半年前には戻る予定

だけど判らない、期限が切れたら新しいボトルを入れにくる、って
言って」

「相変わらず、遊ばせる金、持ってるんだ」

羨ましい事だと、利知未は軽く首を竦めた。

「けど、私は利知未が娘になってくれたら幸せね」

「美由紀さんまで、止めてくれよ。親子でタッグ組まれたら、勝

ち目、無いかも知れネー」

「随分、弱気な事、言ってくれるじゃない？ 倉真」

「お、亀裂が入るか?!」

佐々木が割って入った。

「そんな事、有りませんよ。倉真のセコンドは、あたしが入るんですから。一緒に戦っちゃいます」

「ですって。残念だけど、宏治の入る余地は無さそうよ。諦めましようか？」

「みたいだな。おれもダチに、ボコボコにされたくは無い」
小さく笑って、宏治がタバコへ手を伸ばす。

「結婚は、何時の予定？」

「まだ一、二年は先になるかな」

「それまで、大丈夫なの？」

「勿論。……倉真だったから、決めたんです」

利知末の言葉に、美由紀が優しい笑みを浮かべた。

「ご馳走様。でも、何かあったら遠慮なく私に相談するのよ。何時でも店開けて待っているからね」

「ありがとう」

利知末も笑顔で、礼を言った。

結局、看板までパーティーは続いた。

利知末と倉真は、美由紀の奢りで浮いた金を使って、タクシーを利用して帰る事にした。タクシーが来るまで、利知末も片付けを手伝った。

店を出る前、泊まって行けば良いのと言う美由紀に、宏治が言った。

「勘弁してくれよ？ これ以上、二人に当てられたら、夜、眠れなくなっちゃうよ、お袋」

「そう？ コップ壁に当てて、聞き耳立てるのも楽しそうよ？」
酔っ払った美由紀は、何時もより過激な冗談を言って笑っていた。

これからは、もう少しチョコチョコと顔を出すことを約束して、笑顔でサヨナラをした。

八月は、まだ始まったばかりだ。今月、二人はもう一件、飲み会をする事になる。その前に急な来客が、二人のアパートへやって来た。

二

翌週から利知未は、遅出、夜勤、通常勤務を繰り返した。忙しい生活の中、あつという間に月の中旬に差し掛かる。利知未が休日の平日、懐かしい顔・第二弾がやって来た。

翌日は、利知未は遅出の予定だった。倉真とのんびりと晩酌をしようと思い、今日も空いていた時間を使って、摘みを何品か用意していた。

夕食も終わり、入浴も済ませた夜・九時過ぎ。来客を知らせる呼び鈴が鳴る。リビングで二人が、顔を上げる。

「誰だ？ こんな時間に」

テキストを開きかけた手を止め、倉真が呟いた。

「あたしが出るよ？ 倉真、勉強してて」

「…夜だしな。俺が出る」

少し考えて、利知未を制して玄関へと向かった。

ドアチェーンを掛けたまま、扉を細く開いた。隙間から覗かせた顔を見て、倉真は目を丸くする。

「バンワ」

「準一！ どうしたんだ、こんな時間に?!」

慌ててチェーンを外して、大きく扉を開く。

「別に、仲間の家へ遊びに来てみただけだよ」

ヘラリと笑っている。缶ビールをワンケース抱えていた。

「はい、土産」

ダンボールごと倉真に手渡して、ニコニコしている。

「どうしたの、倉真。誰だった?」

奥から利知末が顔を出す。倉真と同じ様に、目を丸くした。

「ジユン? 行き成り、どうした?」

また、少し昔の自分が顔を出す。

「二人で同じ事、聞くんだな」

「当たり前だろーが。行き成りの訪問にや、チヨイ時間が遅過ぎだ」

ビールケースを片手で支えて、倉真が準一の頭を軽く小突いた。

「イッテ! 相変わらず手が早いな」

「兎に角、上がって? 折角、来たんだから」

「お邪魔」

「マジ、邪魔者だよ」

利知末に促されて、準一が上がり込む。倉真が呆れてぼやいていた。

三人でリビングへ戻り、倉真はテキストをテーブルの端に寄せた。

「結構、広いんだな」

キョロキョロとリビング中を見回して、一人掛けのソファへ勧められる前に腰掛ける。

その様子を見て、相変わらずの準一に利知末は小さく笑ってしまふ。

『すっかり弟、だな』

利知末だけじゃない。倉真にとつても、弟分だ。

「で、本当にどうしたの？」

「住所改めて見たら、バイクで二十分位で来れそうだったから、試してみた」

「それだけか？」

「それだけだよ。酒屋に寄つて来たから、二十五分掛かったな」
時計を見て準一が言う。

「にしては、どうせなら冷えたビール持つて来いよな？」

「冷凍庫へ入れとけば、直ぐ冷えるよ？」

「じゃ、折角だから、そうしようか？」

利知末がリビングを出た。ドアの脇へ置いてあつたビールを、箱ごと持とうとする。

「俺が持つてくよ」

倉真が、利知末の変わりに持つてくれた。

「ありがと。今夜は、晩酌にしちやおうか？」

「……だな」

準一がいるのでは、勉強どころでは無さそうだ。二人の仲良い様子を見て、準一はニマニマしていた。

先に、冷やしてあつたビールを出して、昼間から用意してあつた摘みも、冷蔵庫から取り出して来た。五ヶ月前の、透子の結婚式の時、貰つて来た引き出物に8客セットのグラスが有つた事を思い出して、利知末は棚の奥から引つ張り出した。

『始めて、この部屋へお客が来たつて事だ』改めて、驚いた。

引つ越して来て、一年四ヶ月以上が経っている。こんな時間でもなければ、ワクワクする事なのかも知れない。現在、夜の九時半を回っている。

利知末が用意してくれた摘みと酒を、三人で飲んだ。

「樹絵とは、会えてるの？」

「連休の度に、泊まりに来るよ」

「その為の引越しだったのか？」

「大半ね」

倉真の質問に軽く答える。 倉真は、準一が引越した切っ掛けは聞いた事が無かった。

「それより、この前バックス行っただって？ 呼んでくれよな」

「バックスには、顔出してたってな」

「アダムにも良く行くよ？ 樹絵が泊まりに来ると、アダムのマスターに挨拶をしに行くからね」

話を聞いて、樹絵も確りしている、と思う。

利知未は、アダムにも最近、行っていなかった。 忙し過ぎるのは、理由としてはある。

「その内、あたし達も顔出さないかね」

「そうだな」

倉真は、偶にはアダムへ行く事もあった。 その度に、今度は利知未も連れて来いと、マスターから言われている。

「それよか、いい眺めだな。 利知未さん、何時も家だとそんな格好してんのか？」

暑さに負けて、利知未はチューブトップに、短パン姿だ。

素肌にバスタオルを巻いているのと、露出度的には指して変わらない。 利知未は、口に運んでいたグラスを持つ手が止まる。

「いやらしいな」 少し赤くなって、呟いた。

「いいよ、着替えてくる」

「別に、いいじゃん？ 倉真の前で手を出す程の、馬鹿じゃないよ」

「お前が、行き成り来るからだろうが」

「お陰で、良い目の保養が出来た」

準一は、倉真に睨まれても、気にもしないで酒を飲んでいる。

「そろそろ、ビール冷えたんじゃない？ 持って来ようか」

「あたしが行くよ」

準一を止めて、利知末がソファから立つ。冷蔵庫の中身は、余り見られない物ではない。

ついでに寝室へ寄り、上着を引っ掛けて来た。

冷えたビールを追加して、再び飲み始める。

「遊びに来るには、丁度イイ距離だったな」

「今度、来る時は連絡寄越せよ？」

「そーしたら、ご馳走でも作ってくれるのか？」

「バカ言え、礼儀だろうが。二人とも居なかったら、どうするんだよ？」

「諦めて帰るよ？ したら、和尚の所まで遊びに行くのも良いし」

「礼儀ねえ……。倉真は、何時か克己の所へ行った時も、連絡したの？」

利知末に突っ込まれて、しまったと言う顔をする。利知末がくすりと笑う。

「行き成り行ったんでしょ？」

「何だ！ 人のコト、言えねーじゃん！」

準一も調子に乗って、笑い出した。

「……ま、俺の事は置いといて。家は、利知末の仕事も時間がまちまちだろうが？ 克己の所は、休みが決まってるからな」

「克己の事だから何時、行ってもニコニコして迎えてくれるんでしょ？」

利知末はお見通しだ。準一と同様、倉真も克己の前では弟分になっってしまう。

克己は何時、行っても、何時も笑顔で迎えてくれていた。兄貴分の克己には、倉真もつい甘えてしまうのだ。倉真は一応、反省をした。

「ま、それは置いといて。先に連絡寄越せば、ご飯くらいは食べ

させてあげるけど？」

「じゃ、今度はそうしよう」

「そうして。今夜は偶々、摘みを用意してたから良かったよ」

「何時も酒の肴、作ってくれてるんじゃないんだ」

「仕事時間まちまちだからね。出来る時と、出来ない時がある」

「じゃ、今夜はラッキーだった！ 利知未さんの料理、美味しいよな」

準一は一人で、パクパクと口へ運んでいる。

「飯、ある？」

「摘みで食べるのか？」

「酒の摘みって、飯のおかずにも丁度いいよな。オレ今日、食ってない」

準一の遠慮のなさに、利知未は吹き出してしまった。

「いいよ。まだ少し残ってたから」

「やった！ 流石、姉御だ！」

笑いながら利知未はキッチンへ消える。

「姉御だ？」

「だって、昔っからそうだったじゃん？ 兄貴の方が、合ってたか？」

知り合ってからコレまでの利知未を思い出して、準一が言う。

「確かに兄貴分、って感じの方が強かったな」

倉真も昔の利知未を思い出して、懐かしげに笑った。

利知未は、夕飯の残り飯を持って来た。惣菜の残り物も出してやる。準一は喜んで平らげてくれた。

その夜、準一は二人のアパートへ泊まってしまった。ソファを借りて、夏掛けの布団を一枚、貸して貰って眠った。

翌朝、朝食までご馳走になって、ここから仕事へ向かって行った。

準一が遊びに来た翌週、利知未は火曜日から、通常勤務だ。その後、休みが明けて夜勤となり、月末は遅出となる。倉真は、このタイミングを見て思い付いた。

出勤し、休憩時間に保坂へ声を掛けた。

「木曜、夜、時間あるっすか？」

「飲みにでも、行くか？」

「っすね。紹介しますよ」

「女をか？」

「って言うか、取り敢えず、婚約者を」

「いいな。それなら他の連中にも声、掛けとくよ」

「全員に、紹介する事になるのか？」

「いいだろ、別に。将来のカミさんだろ？ 顔、知って貰った方が何かと便利だと思うぞ」

「そうなのか」

「そうだよ」

ニヤリとして保坂が言った。

まともな深い意味など無い。ただ、全員で倉真をからかってやろうと、考えたただけ。

それから保坂に声を掛けられて、先輩従業員と、社長までチラリと顔を出してくれる事になってしまった。

帰宅してから、利知未に伝えた。

「二十四日、夜七時半頃、間に合うか？」

「大丈夫だと思うけど。良いの？ あたしが行って」

利知未には、ただの飲み会だと言ってある。紹介するから、等と言っては構えてしまうと考えた。社長が来る事も内緒だ。

「リクエストされたんだよ、連れて来いって」

「なら、行かなきゃだ。仕事の都合で、少し遅れる可能性はあるけど」

「構わないよ、言っただけから」

結婚前から、内助の功だ。下っ端従業員は、先輩方からの要望には応える義務がある。城西中学応援団で覚えて来た事だ。

男社会では色々、縦系列の繋がりも重要な事は確かだろう。

仕事へ行く前から服装を考えた。硬過ぎも、その逆もいけないと思う。時々、病院へ行く時の出勤着として使っている、パンツスーツを着て行った。

場所は、倉真の働く整備工場近くの居酒屋だった。兼ねてからの予告通りに、三十分と少し遅れて、八時過ぎに到着した。

利知未が到着するまで、倉真は先輩方の接待に忙しかった。

始まって其々、一杯は飲んでいた。社長と娘婿は、八時に工場を閉めてから二人で遅れてやって来る。保坂と、もう一人の先輩と、三人が待っている居酒屋へ利知未がやって来た。

「ごめん、やっぱり遅れちゃったよ」

先輩に勺をする倉真の後ろから、声を掛けた。

「悪かった、忙しかったか？」

「うん、少しね」

二人の会話途中に、保坂が声を掛ける。

「彼女が、お前の婚約者か？……面食いだっただんな」

利知未を見て少し驚いた。背も高い。保坂と大して変わらない。

利知未は二人に会釈をして、促されるまま席へついた。

「下田さんと、保坂さんだよ。彼女が、婚約者の利知未です」

「瀬川です。館川が、お世話になっております」

照れながら、利知未も挨拶をする。

「美人だな」

下田は一言しか出なかった。目を丸くしている。利知未は照れ臭い笑みを見せる。

「ま、飲みましょ」

倉真が言つて、下田のグラスにビールを注いだ。保坂は、利知未のグラスにビールを注いでくれた。会釈して勺を受け、返杯した。始めの一杯を飲み終えた頃、社長と娘婿がやって来た。

「社長が来たぞ」

保坂が倉真に耳打ちをした。それを小耳に挟んで、利知未は驚いた。

「倉真？」

袖を引つ張つて、少しだけ倉真を睨む。

社長まで顔を出すとは、利知未は聞いていなかった。慌てて立ち上がつて頭を下げた。

精悍なイメージの、ガツチリした人だった。頭を下げた利知未を軽く手で制して、従業員に促されながら上座へ通つた。

「彼女か？ 館川の婚約者」

娘婿が、倉真に聞いた。利知未は、社長と並んだ娘婿にも頭を下げる。

「始めまして。 館川が、何時もお世話になっております」

「確りしたお嬢さんだな」

社長は、そう言つてくれた。

「瀬川 利知未です」

バックから名詞を取り出した。口で医者だと言つよりは、良いだろうと思う。

社長も名詞を返してくれた。

「（有）日高自動車整備工場、代表、日高 杜夫 様、ですね」

「瀬川さんは、大学病院にお勤めですか」

感心していた。成る程、道理で確りしたお嬢さんだと、呟いていた。

外科医である事は、口に上せなかった。それは社長の思い遣りだと思ふ。

「娘婿の、昇です」

自己紹介は終えたが、利知未は緊張してしまった。

『帰ったら、倉真に文句、言つてやらなきゃ』　内心で、そう思つていた。

名詞も偶々、財布に入れていただけだ。先輩方だけの飲み会なら、職業も詳しく説明するのは、止めようと思つていた。

ただ相手が社長となると、家を飛び出し、実家と連絡も取り合つていない倉真にとっては、社会での親代わりの様な物だ。従業員
の婚約者を紹介されて、仕事の話をはぐらかす事はしないだろうと
考えた。

それでも倉真の職場仲間は、社長始め、気の良い人たちの集まり
だった。酒が進むに連れて、利知未の緊張も段々と解れ始めた。

「しかし、不公平な世の中だな。館川にどうして、こんなに良い
お嬢さんが、くつ付いたんだ？」

下田の言葉に、保坂も突っ込む。

「本当だ。館川には、勿体無い美人だよ」

言われて、倉真は言い切つた。

「俺じゃなきゃ、駄目なんすよ」

「惚気か？　この野郎」

保坂が、倉真の脇を軽く肘で小突いていた。

社長と娘婿は、それから暫くして席を立つた。

「祝い代わりだ。これで払っておけ」

そう言つて、社長は財布から三万円を取り出した。

恐縮する倉真の前に金を置いて、言つた。倉真は立ち上がつて、
キツチリ礼をして見送つた。

「お前ら、明日、遅刻するなよ？」

「はい！　ご馳走様です！」

保坂が元気に答えていた。それから暫くして、下田も席を立つ。

「社長の置いて行つた金で、足りるか？」

「平気です。ここ、そんなに高くないですから」

保坂が倉真の変わりに答える。この店を指定したのは、彼だった。

「そうか、じゃ、悪いな。お先」

「お疲れです」

社長達が立つた時と同様、倉真が立ち上がってキツチリ礼をして見送った。利知末も立ち上がり、頭を下げた。それが、十時半前だ。

保坂と三人で、もう暫く酒を飲んで、十一時過ぎには、お開きにして帰宅した。

帰り道、倉真に利知末が、少し膨れて言う。

「緊張した……。社長さんが来ること、何で言わなかったの？」

「余計に緊張しただろ、先に言っていたら」

「……そりゃ、そうだけど」

「名詞、持ってたんだな」

「一応、持たされてるよ。今日は、持たされて良かったと思つたけど……。何時もは、殆ど使わない。名刺の出し方なんて、バカス手伝つてた十ヶ月が無ければ、全然、判らなかつたよね」

「いろいろ身になってる訳だ」

「あたしみたいに、どうしようもない生活をしてた奴は、社会で勉強した事の方が、学校で覚えた事より役には立つてるとは思う」

「お前がどうしようもないんじゃないじゃ、俺はトンでもなくどうしようもない奴つて事に、なるんじゃないか？」

「大して変わらないでしょ。男か女かで、行動範囲が広いのか、狭いか？ 程度の差だよ。あたしも、FOXやアダムのマスターや美由紀さんに出会えなかつたら、今頃、どうなっていたのか……。考えると、恐ろしいな」

その出会いが無かったのなら、あの、悲しい死を迎えてしまった由美のような道に、足を踏み込んでいたかも知れない。女としては、その方が有り得る人生だったと思う。

あの頃を思い出して、悲しい気分が、少しだけ蘇ってしまった。

目を伏せ、歩き出す利知未の変化に、倉真は気付いた。

「どんな人生、生きて来てたって、俺はお前とこうなっていたと思うぜ」

肩を抱いて、確りと引き寄せた。引き寄せられて、利知未は気持ちが悪く落ち着いた。少しよろけて、寄り添ったまま、黙って歩き出した。

三

利知未を職場仲間で紹介した、その二日後。二十六日・土曜日。倉真は保坂に誘われて、夜、また飲み屋へ行った。

利知未には、職場から連絡を入れた。

「保坂さんからの相談事ね。いいよ、夕飯は明日の朝ご飯に回すから。ゆっくりして来なよ?」

電話口でそう言われて、安心して出掛けて来た。

居酒屋で酒を飲み始めて、保坂が言い出した。

「滅多な奴には、相談出来ないんだけどな……。館川の意見、聞かせてくれないか?」

「まず、その内容が判らないと、何とも言えないけどな」

「もう少し、待ってくれ。今に来るから」

どうやら、紹介したい奴でも居るらしいと思う。女か? とは、

思った。

暫くすると倉真も知った顔が来店し、保坂を見つけて近付いて来た。

「こんばんは。 館川さん、だったよね？」

目の前に現れた女はそう言つて、保坂の隣へ腰掛ける。

「飯野さん、でしたっけ？」

飯野 愛美^{まなみ} と言う、つい最近、整備工場へ高い車を車検に出した客だった。

「何だ、誰かと思つたら。 館川さんの事だったのね」

愛美は、保坂にビールを注いで貰つた。 口をつけて言つた。

「これから仕事だから。 あんまり、ゆっくりはしてられないわ」
今は、もう九時近かつた。 この時間からの仕事とは、いったい何なんだろうと倉真は思う。

「一緒に、行くんでしょ？」

そう言つて愛美は、べたりと保坂にしな垂れた。

夜の商売の人らしい。 これは、同伴出勤と言うヤツなのだろうか？ 愛美の態度にやや辟易しながら、倉真はそう考えた。 それなら保坂に対する態度も、サービスの一環だと思つて頷ける。 スナックか、キャバクラだろうと考えた。 財布の中身を考えて断り掛けると、保坂が耳打ちをする。

「館川、一緒に来いよ？ 金を出すから、彼女の仕事、判つてくれ。それからじゃないと、話が出来ないんだ」

「いらつしやいよ？ サービス、してあげるから」 水商売らしい笑顔で、愛美が言う。

保坂の悩みは、ここからが本番らしい。 どうせ、利知未は夜勤だ。 倉真は付き合つてやる事にした。

それから三十分ほどで、居酒屋を出た。 店を出て向かつた先で、倉真は目を丸くした。

「ここが、あたしの仕事場。何してるの？ 早く！」
立ち止まってしまった倉真を振り向いて、愛美が言う。 保坂は頭を掻いて、困ったような顔をしていた。

一時間、一万五千円。 パートナーは、保坂が適当に決めてしまった。 個室へ通され、やる事は、…… コスチューム・プレイ。
愛美の職場は、そう言う職場だった。

延長もせず、時間キツカリで出て来て保坂を待つ。 店の外でタバコを吸って、考えてしまう。

『こりゃ、利知未にばれたら、事だな』

昔から、その手の店へは通っていた倉真だ。 コスプレは流石に初めてだったが、やる事は結局、同じだ。

保坂が、何を悩んでいるのか？ 相談の本番は、これからになるだろう。

店に入って、何もせずに出てくる倉真では勿論、無かった。

『けど、アンマ良くは無いな。 この店は』 二、三の店は知っている。 それと比べて、そう考えた。 好みの問題かも知れない、とは思う。

利知未にチャイナドレスを着せた夜の方が、盛り上がったと思った。

二十分程して、保坂が出て来た。 面目無さそうな顔をしていた。 それから道端の屋台のラーメン屋で、ビールを飲みながら話をした。

「で、いったい、どういう流れで、彼女とこうなったんすか？」

「お前、あんまり驚いては居ないみたいだな」

「……まあ、チョット。 って、それはどうでもイイですよ」

下手な事は言わないに限る。 自分がその手の店へ通っていた事実は、漏らさない事に決めた。

「中学時代の、先輩に当たるんだよな。……車検、高い車を持って来ただろう？ おれは四輪が好きでこの仕事やってるからな。 女が乗る車じゃないと思って、興味本位で聞いてみたんだ」

「で、話が盛り上がった、……って事じゃ、無いだらうな」
倉真も、あの車のオーナーは別人だろうと見ていた。 愛美は、ただ乗るだけの人間だ。 運転技術も、危なっかしい事この上なかっただろうと思う。

頑丈な車のため流石に凹んでいる所はなかったが、細かい傷はかなりついていていた。 バックの時、どこぞの車か壁にでも擦りつけていた様な痕だ。

「車より、客として誘われた、って処か」

「意外と鋭いな」

ラーメンを食いながら、保坂が顔を上げる。

「客とソープ嬢の関係なら、悩むことも無いんじゃないんすか？」

「……それだけならな」 溜息を付く。

保坂は、何を考えているのか。

「この前、女紹介しろって、言ったよな？ このままじゃ、ヤバイと思ったからなんだよ」

元々、好意を持っていた相手と言う訳ではないが、愛美は、何故か保坂にご執心な様子を見せ始めた。 そう言う態度を取られて、嫌な気は勿論しない。

ただ、それが単に客を相手のサービスなのか、それとも二心があるの事なのか……？

先ずは、その点が不明だと言う。

保坂も健康な男だ。良くしてくれるソープ嬢が居るのなら、ついでに通ってしまったりもする。金も掛かる。

愛美は、中学時代の先輩だ。住所は割れているし、職場も知れている。今の態度が客に対するサービスなだけなら、店から足が遠のいたからと言って、しつこく迫ってくる事も無いとは思う。

けれど、もしも違う気持ちがある、あつての事なら……。

「……って、言われてもな。……俺も、女の気持ちは、良く判らないっすよ?」

「だよな。ただ、客観的に見て、どう思う?」

「どの辺りを?」

「彼女の仕事も判った上で、これから、おれは、どうするべきなのか」

「話し合うより、無いんじゃないっすか?」

「どうやって切り出させて? もしかして、おれに惚れてるんですか? とでも、聞けば良いって言うか?」

「……それは、確かに」

頭脳労働は苦手だ。けれど、この事を利知未に話して、意見を聞く事もし難いのは事実だ。あの店へ行った事を伏せても、言える事じゃないと思う。

「サービスだとしても、肯定するだろ? そうじゃ無いにしても……」

「……」

「どっち道、解決はしてくれないか」

「だと思っよ」

「ちゃんと彼女、出来てからなら、いくらでもし様が有りそうな気もするな」

「それは、おれも思ったよ。だから、この前の話な訳だ」

「……成る程」

取り敢えず、利知未に恋人募集中のナースでも紹介して貰うのが、先決かも知れないと倉真も思った。

帰宅したのは、明け方近かった。利知未は勿論、まだ帰っては居ない。

倉真はシャワーだけ浴びて、ベッドへ潜り込んだ。

翌日は日曜だ。帰宅して爆睡している倉真を見て、利知未は起こすのを止めた。朝食を済ませて風呂へ入り、洗濯物を干した。午前十時半過ぎには、利知未も寝室へ引っ込んだ。倉真は、まだ眠っていた。

「……昨夜、何時に帰って来たんだろ？」 呟いて、そっと倉真の隣へ身体を横たえる。直ぐに寝息を立て始める。

二人揃って、午後三時過ぎまで眠ってしまった。

倉真は、腹が鳴って目を覚ます。利知未は隣で眠っていた。
「もう、こんな時間だ」

枕元の目覚まし時計を見て、倉真が呟いた。半身起き出して、大きく伸びをした。また腹が鳴る。その盛大な音で、利知未も目を覚ました。

「……ん？ おはよ」

「悪い、起こした」

利知未も半身起き上がり、軽く目覚めのキスを交わした。また倉真の腹が音を出す。その音を聞いて、利知未は小さく吹き出してしまった。

「昨夜の残りで、良い？ 半端な時間では有るけど」

「構わネーよ。昨夜は、悪かったな」

「いいよ。保坂さんの悩みは、解決したの?」

言いながら、ベッドを降りた。

「解決するには、お前の協力が必要そうだ」

「何? ……ま、いいや。ご飯食べながら、話そう?」

キッチンへ出て行く。

顔を洗って、倉真の為に昨夜の惣菜を温め直して、食卓へ並べた。
倉真はガッツいていた。

「あたしが、何の協力を出来そうなの?」

「女、紹介してくれ」

「保坂さんに?」

「そうだよ」

「そう言う悩みだった訳?」

「ま、解決策として、必要そうだな」

詳しく話すのは、止めた。

あの手の店へ通っている事を除いては、保坂も悪い奴じゃない。

余り綺麗でない事实は、隠すに限るだろうと考える。

「良いけど、来月になるよ」

「もう月末だからな、それで良いだろ」

「でも、ナースは紹介、出来ないかも」

自分と倉真を考えて、これほど時間が合わない相手を紹介するのも、
気の毒だろうと考えた。しかもナースには、笹原フリークが多過
ぎる。

「会計でも薬局でも、大学時代の友人でも、誰でもいいよ」

「好みは無いの?」

「……聞くの、忘れた」

倉真が少し、情けない顔をした。

「それじゃ、聞いて来てよ。そしたら、探してみるから」

「判った」

話は、それで終わった。

これ以上、詳しいことを話すのは禁句だ。　また、大喧嘩になつてしまい兼ねないと思う。

倉真は利知未に、新しい内緒事が出来てしまった。

倉真の頼みを引き受けた利知未は、香にでも、誰か探してみて貰おうと思った。　夜勤明けの勤務で、香に話してみようと考えていた。

二〇〇六年　九月十八日　（2008.4.13　改）

利知未シリーズ・番外2

研修医一年・六月から八月　二人で見る

未来　　了

3 研修医一年・八月（後書き）

お付き合い、ありがとうございました。ここまでが、番外の二つ目となります。

予定通りの週一更新とはなりませんでした。今週中に、必ず続きをお届けできるように頑張っております。また、宜しくお願い致します。 > () <

次回、番外の3つ目のタイトルは、『見つけてくれて、ありがとう』 また今回同様、利知未シリーズと、検索キーワードへ入力しておきます。それでは、またお会いできる事を楽しみにしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0911e/>

二人で見る未来 （利知未シリーズ 番外2）

2010年10月8日15時31分発行